

■令和2年度 企画展2 関連講演会（第2回）

天王山式土器から見た東日本の弥生社会 - 古津八幡山遺跡成立期の動向 -

渡邊朋和（新潟市文化財センター）

■はじめに

皆さん、こんにちは文化財センターの渡邊です。今回の企画展「天王山式土器から見た東日本の弥生社会—古津八幡山遺跡成立期の動向—」を担当させていただきました。

講演の前に少しだけ話をさせていただきますが、私は30年くらい前に、初めて古津八幡山遺跡の発掘調査を行う機会がありました。そこで、今日の主要なテーマである天王山式土器に初めて触れたのですが、2～3年ほど前から、今までは天王山式土器を真面目に研究していなかったのではないかなということを感じています。

今年の3月に刊行した『新潟市文化財センター年報』第7号で、文化財センター近くの西区六地山遺跡出土の弥生土器を再整理し、報告をさせていただきました。六地山遺跡は、1956年に長岡市立科学博物館が発掘調査した遺跡で、残念ながら主要な遺物は現在新潟市には所蔵されていません。それを2017年の企画展前に借用し、接合・実測などの再整理をし、資料報告をしたのですが、その際に、いろいろ新たな発見があって、この再整理をきっかけとして、見解を変えたことなどを中心に、話をさせていただきます。

それと、あらかじめお断りしておきますが、今日の講演会は、当初予定としては13時半から15時になっていました。講演後に展示解説を予定していたのですが、今日お集まりの皆さんが大勢展示解説に参加されると、非常に密になってしまいますので、できればその内容も含めて、講演会の中で話をさせていただきます。

実は、今日は非常に話しにくい状況にあります。今日のテーマである天王山式土器を何十年も前から研究されている、福島県の中村五郎先生と、先回ご講演をいただいた明治大学の石川日出志先生がいらっやっています。天王山式土器の研究をする上で、必ずお名前のお出でくるお2人です。下手なこと

を言うと批判を受けるというのがもう目に見えているので、非常に話しにくいのです。自分自身も話をするのがあまり得意ではないので、途中でしどろもどろになるかもしれません。その辺ご容赦いただきたいと思います。

もう一度、文化財センター年報の話に戻ります。実はこの年報の中で最初は、石川日出志さんの天王山式土器研究批判のようなことをかなりストレートにいろいろ書きましたが、編集担当から、「そんなことを書くと失礼だから削除するように。」という検閲が入りまして、だいぶ柔らかく書かざるを得なかったもので、そういう話もちよっと出てくるかもしれませんので楽しみにして下さい。では、座ってやらさせていただきます。

主題として「天王山式土器から見た東日本の弥生社会」、副題として、「古津八幡山遺跡成立期の動向」としてあります。先ほど話をしましたように、新潟市にある国指定史跡古津八幡山遺跡を考える上で、天王山式土器を理解しないと遺跡の全容を正確に語るができないというのが、今回の企画展を開催したきっかけです。

この画面は、私が今まで行った古津八幡山弥生の丘展示館の弥生時代に関係する企画展のチラシです。合わせて8つの企画展を行ったこととなります（スライド2）。副題で邪馬台国の時代と書いてあります。邪馬台国というのは2世紀末から3世紀中頃の話ですが、今回話するのは1世紀頃の話ですので、厳密にいうと年代が合いませんが、ご容赦いただきたいと思います。弥生時代後期は「奴国」というよりも、「邪馬台国」の方が親しみがあると思い、そのようにしてきた経緯があります。これまで、新潟県を取り巻く地域の弥生時代・弥生文化、それから鉄器などについて企画展を行ってきたのですが、今回は総括ということで、天王山式土器をもうちょっと広い視点で見ようというのが企画展の主題になっています。

■講演のあらすじ

事前に、今日どのような話をするのかということ
を述べさせていただきます（スライド3・4）。

（スライド3：①）古津八幡山遺跡では、天王山式系
列土器（広義の天王山式土器）はありますが、弥生
時代の中期の土器は1点も出土していないというこ
とです（注1）。古津八幡山遺跡では、北陸で中期
（畿内第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・第Ⅳ様式）に編年される
土器が1点も出土していない事実は重要です。

天王山式土器の研究史の話をするとう長くなります
が、天王山式土器がどの時期かということだけ少し
話をさせていただきますと、今日、来られている中
村五郎さんは中期後半と編年的に位置付けていらっ
しゃいます。一方、石川日出志さんは20年ほど前に、
主に北陸の資料を集成されて、弥生時代中期の土器
と出土しているというのは、実は一緒に出ているも
のじゃなくて混在しているものだから、中期ではな
くて後期にこそ伴うという論文を書かれました。現
在は、多くの研究者の方々は、石川説に拠って、天
王山式土器後期説ではないかと思っています。それを補
強するのが、私は古津八幡山遺跡の発掘調査成果で
はないかと思っています。

（スライド3：②）再び古津八幡山遺跡のことになり
ますけれども、古津八幡山遺跡では、様々な遺構が
見つかっています。竪穴住居とか環濠の中から、天
王山式土器と地元の土器と共に、北陸系、石川県と
か富山県とかで作られたものと類似する土器が一
緒に出土していますが、これらは、北陸の編年で言
うと後期に属するものです。古津八幡山遺跡の調査
成果から言うと、天王山式土器が後期に併行するとい
うことは間違いないと私は思っています。

（スライド3：③）後で詳しく説明しますが、標式遺
跡である白河市天王山遺跡の天王山式土器は後期前
半の新しい段階に併行すると考えています。決して、
後期の初め頃ではないと思います。

（スライド3：④）この時代を研究する上で重要な
のは、弥生時代の中期後半や終末、その後の後期初頭
や前半頃の遺跡が少なく、出土している土器も非常
に少ないということです。このことが、この時代を
研究する上で大きな支障になっています。

（スライド3：⑤）遺跡が少ないという特徴がある一
方で、弥生時代の中期の遺跡と後期の遺跡は、継続
しない場合が多いように思います。遺跡が断絶して
いる。これは新潟県に限ったことではなくて、東日
本全域がそうだと思います。

（スライド3：⑥）今回の企画展は、天王山遺跡で出
土している天王山式土器の前段階を主とした展示に
なっています。後期前半、初め頃ですが、この頃の
天王山式系列土器は、弥生時代中期後半の様相、後
で詳しく説明しますが平行沈線文系土器の要素が色
濃く認められます。

（スライド3：⑦）ある研究者の方は、弥生時代の中
期後半までは、各地域で、様々な地域差が認められ
るけれど、それが後期になると地域差がなくなり、
東北一円が天王山式土器という土器分布圏で統一さ
れると言われていました。しかし、決してそのような
ことはなくて、後期になっても地域によって明確な
地域差があると考えています。

（スライド4：⑧）今回の話の中心になりますが、天
王山遺跡の天王山式土器の成立以前に、各地域の土
器を見ていきますと、非常に似通った文様が地域を
越えて出土していることがわかります。このことか
ら、後期初め頃に、極めて広域に人の往来があった
のではないかと考えています。

（スライド4：⑨）⑧と同じことなのですが、天王山
遺跡天王山式土器が成立する以前の後期前半にはあ
る特定のいくつかの文様が、あえて入れなくていい
部分に入れられます。出自・系統の異なる文様が一
個体・一文様帯内に描かれる土器があります。元々
の土器にある文様に付加的に入れられる文様で、そ
れを私は「キメラ」と言っているのですが、このよ
うな現象が見られるのも後期前半の特徴の一つと考
えられます。

（スライド4：⑩）例として北陸を上げていますが、
北陸の周辺だけでは出自を辿ることができない文様
があって、東北北部や北海道南部から、直接・間接
的にもたらされたと考えられるような土器も出土し
ています。それは当然日本海を介してということに
なると思います。

（スライド4：⑪）最後に、今回はほとんど触れませ
んけれども、土器だけが流通していたのではなく、
背景にある重要なものの一つが鉄器ではないかと考
えています。弥生時代後期の遺跡から石器はほとん
ど出土しません。石器は石鏃やごく少数の磨製石斧
ぐらいです。代わりに何を使ったのかが重要です。

古津八幡山遺跡では、50棟以上竪穴住居が見つ
かっていますが、磨製石斧は4・5点しかありませ
ん。木を切るのに使用したのは、鉄製の斧でし
ょう。古津八幡山遺跡では出土していませんが、
新潟県内でも何例か鉄製の斧が出土しています。こ

の右側にあるのが三条市経塚山遺跡の板状鉄斧と長岡市姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧です。最近の研究で、朝鮮半島の慶尚南道付近に非常に似かよったものが出土しているということがわかってきました。それから、新潟県ではないのですが長野県北東部の下高井郡木島平村根塚遺跡から出土した柄に渦巻がある剣も、よく似たものが朝鮮半島で見つかっています。釜山市の西側にある金海市良洞里遺跡などです。その頃、国内では鉄の生産はしていませんから、朝鮮半島からもたらされたことは間違いありません。

日本海沿岸では、土器だけではなくて、こういった鉄器なども、日本海沿岸に入ってきているということ念頭において、今日話を聞いていただければと思います。

ちょっと専門的な話です(スライド5)。一般的向けの講演会で土器型式の話の本当はしては駄目だと思うのですが、少しだけ話をさせてください。今日話をする主体となる内容は、この表の後期前半という時期が中心になります。西暦の紀元前後から1世紀ぐらいの間だとお考えください。

■ 0_1 プロローグ1

最近、日本海の物流を考える上で興味深い資料が、新潟市江南区道正遺跡の発掘調査で見つかったので、ちょっとだけ紹介させていただきます(スライド6)。古墳時代前期の壺形土器の口縁部にヘラ状の施文具で船を描いたものです。石川日出志さんの講演会で、新潟から北は丸木船、南は準構造船が往来していたという話をされたかと思います。準構造船というのは、丸木船では波を受けたりすると、中に水が入ってしまうので、船体の脇とか前後に板を立てて、水が入りにくくするような構造の船を言います。まさにこの土器は、この準構造船を描いた絵ではないかと思います。ここに一艘、それから左側に簪みたいなのが2つありますけれども、少なくとも3艘の船が描かれているように思います。この棒状のものはオールですが、8本が片側に描かれていますので、左右合わせると16本(16人)になると思います。右側に描かれているのが縦板型準構造船で、左側に2艘描かれているのが貫型準構造船という船です(スライド7)。参考写真とよく似ているのがおわかりになるのではないかと思います。この土器には3艘しか描かれていませんが、こういった船団が日本海、新潟近辺の海を往来していたということを想像することができるとても重要な資料です。古墳時代前期ですから、今日話をする時代よりも200年ぐ

らい新しい資料ですが、似かよった船が弥生時代後期にもあった可能性も高いのではないかと思います。

■ 0_2 プロローグ2 天王山式土器を研究する目的

私は最近、この天王山式土器を少しまじめに研究しているのですが、何でこの研究をしようと思ったのかという話をさせていただきます(スライド8)。(スライド8:1)先程、話をしましたように、国指定史跡の古津八幡山遺跡の消長を明らかにするというのが、一番の目的です。土器がどの時代・時期のものなのか、古いのか、新しいのかということがわからないと、例えば遺跡の消長の話を考えたとしても、まったく話が逆転をしてしまうことになりかねないので、そうならないために、まず土器の編年、前後関係を明らかにする必要があるということです。

(スライド8:2)それから、ほかの時代でも同様なのですが、日本海に面している新潟県は南北に長いので、各地域のものが入ってきて、それが一緒に使われるというのが特徴です。古津八幡山遺跡もそうですし、海岸沿いの遺跡では特にこの特徴が顕著です。このようなことから、土器の研究をすると、土器そのものだけではなくて、他系統の土器はどの地域から来ているのかというような人の動きまでもが垣間見ることができるということです。

(スライド8:3)あとそれからもう1つ、まじめに研究をするようになったきっかけです。2019年に企画展の準備のために、北陸-富山県・石川県-に一週間ほど資料調査に行きました。その際に見た石川県の能登半島にある鹿島郡中能登町大槻3号墳の土器が妙に気になりました。特に気になったのは口縁部の下に入れられた小さな連弧文です。天王山遺跡の天王山式土器は、決してこのような部分に文様は入れないんですね。最初にこれを見た時には、天王山式土器が分布する外殻圏の土器だから、こんな変なところに文様を入れるのかなと思ったたら、実はそうじゃなくて、よくよく調べてみると、同じような土器が、青森県とか北海道とかにある。それから各地域の資料の見直しをしたら、似たようなものが点々と日本海沿いにあるということがわかってきました。北方系の要素がダイレクトに北陸まで行っている可能性が見えてきました。

(スライド8:4)それから、先程紹介した六地山遺跡の再整理による新発見です。

(スライド8:5) 最後、恩師である磯崎正彦先生の業績です。私が大学1年の時に、この文化財センターに程近い西区(旧黒崎町)緒立遺跡の発掘調査に最初に参加をしたのですが、この調査担当者が磯崎先生でした。磯崎先生は1956年に『上代文化』という雑誌で「天王山式土器の編年的位置に就いて」という論文を書かれています。実は、この論文が出る前には、天王山式土器は弥生時代のどの時期かということが皆目見当が付かなかった。すごく古く言う人もいれば、新しく言う人もいたような状況でしたが、磯崎先生はこの論文の中で、二本措施文具で描いた平行沈線文系土器と天王山式土器と一緒に出土していることが多いから、平行沈線文系土器に近い時期に天王山式土器は編年されるという結論を書かれています。この論文が、私が天王山式土器を研究する1つの大きなきっかけになっていることは間違いありません。最近ちょっと見落とされがちな研究成果ですので、あえて強調しておきたいと思います。

1. 研究方法

(スライド9:10) 研究方法として、このようなことを皆さんに話をしても面白くないかもしれないのですが、このような研究方法をしていますという話をさせていただきます。考古学の研究者はこんなばかげたことをしていると思っただけならば良いかなあとと思います。

(スライド9:1) まず、研究対象とする時期は、天王山式土器の前後ということで、弥生時代中期から古墳時代前期です。

(スライド9:2) 研究対象の特徴と制約と書いてありますけど、先ほど話をしたように、この時期の遺跡は少ないと思います。完形土器はなおのこと少ないので、本当に破片資料まで集めないと研究できないような状況です。今回の企画展も一般の展示ではとても不釣り合いな破片資料をたくさん展示しているのは、そういう理由です。それを補う形で、今回イラストをたくさん描きましたので、イラストで何とかイメージできるかなと思います(注2)。

(スライド9:3) あとそれから、研究対象としている地域ですが、北海道から関東までです。現在は約1,000遺跡ぐらいの集成をしています。この集成作業をすることによって、地域性の違いや類似する資料を抽出することが可能になると考えています。今回の展示もそういう中で、私が特に気になった特徴的な資料をいくつか取り上げさせていただきました。

(スライド10:4) 発掘調査報告書を調べて、その後

に実際に資料調査に行くのですが、現在、富山県・石川県・新潟県は9割以上、実際見に行つて調査をしていますし、岩手県も8割ぐらい資料調査を行っています。資料調査はこれからも継続していきたいと考えています。

(スライド10:5) それから研究の方法として、型式学的研究、分布論的研究という話をさせていただきます。型式学的な研究は、考古学に関心のある方は何回も聞かれている話だと思います。一番わかりやすい事例は自家用車です。自分たちにとっては当たり前のようなのですが、私が子供の頃の車、それから例えば30代の頃の車っていうのは、メーカーが違っていても、何となく年代毎に形が似ていますよね。それは突然そういう車ができるわけではなくて、年代毎に移り変わりがあります。それと同じように、例えば銅鐸を見本としてあげていますが、これはどっちが古いのか新しいのか、ひと目見ただけではわかりませんが、最初はこういう単純な形だったのが、新しくなるとこうなる。一般的には、前の時期の特徴が次の時期に引き継がれていくということがわかるわけです。この型式学的研究は、モンテリウスの『考古学研究法』が一番の教科書です。私が大学1年生の時に、先程の磯崎先生から「『考古学研究法』をまず熟読するように」と勧められました。私にとっては考古学研究のバイブルだと思っている一冊です。土器の変化する特徴を、このような研究方法で追っていくということを心がけています。

遺跡位置は全てGoogle Earth Proに入れています。この画面では、地図上で河川を表示していませんが、河川なども表示ができます。これに遺跡位置を入れると、実際には自分の知らない土地でも正確に遺跡位置を落とせますし、位置情報をKml形式で取り出して、ほかのGISソフトでも使えるので非常に便利です。今回企画展で作った遺跡分布図もこのデータで作成したものです。参考までに、これは福島県の会津若松市周辺ですけれども、右側に猪苗代湖があって、左側に会津盆地があります。弥生時代中期・後期を色分けして表示したもので、緑が後期、黄色が中期ですが、時期が変わると遺跡の分布する範囲が大きく変わることがわかると思います。

2. 天王山遺跡・天王山式土器

これから土器型式の話になって行きます。段々と専門的な話になって大変恐縮なのですが、まず天王山遺跡・天王山式土器というのはどういうものなのかということをお先に説明しないと、天王山式土器・

天王山式土器と言ってもご理解いただけないのかなと思いますので、まず最初にその話をさせていただきます。

2_1 遺跡の概要

天王山遺跡は阿武隈川の北側にある独立丘陵上、豆柄山、通称天王山に所在しています(スライド16)。平野部からの比高が80mぐらいの山の上にある遺跡です。あとで地図をご覧ください、古代の官道が近くを通っていて、白河関と白河郡衙である関和久遺跡の中間ぐらいに位置するということで、交通の要衝だろうと思われます。

2_2 天王山遺跡天王山式土器

(スライド16: 2_2) 次に天王山式土器についてです。天王山式土器の概念を広く考えている人もいますが、私は天王山遺跡で見つかった土器と同型式・同時期の土器を天王山式土器とする立場です。天王山式土器については何人かの研究者の方が特徴について指摘されています。山内清男先生や、今日来られている中村五郎さん、馬目順一さん、佐藤信行さん、あと石川日出志さんなどです。この特徴は、これ以外にもいろいろあるんですけど、代表的な8つだけ話をさせていただくと、まず、①この例示した実測図は厳密には交互刺突文ではないですが、特徴の一つとして挙げられるのはまず「交互刺突文」です。文様帯を分ける部分に沈線を引いて、それに上下から交互に刺突を加える。②口縁部の突起が発達していること。これ以前の地元の土器にはない特徴です。③受口状の口縁、口の部分が内湾状になるという特徴です。④頸部の一部の横帯状の素文化。頸部の一部に文様が入らない無文帯がある。これが天王山遺跡の天王山式土器の大きな特徴の1つだと考えています。それから、⑤磨消縄文の発達。この実測図の斜線を引いたような部分が縄文なのですが、沈線で区画した文様の中に部分的に縄文を施文するということです。それから、⑥上胴部の下向きの弧線文。頸部の文様帯の下に弧線状のものを連ねている。弧線を連ねた連弧文が入っている。⑦それから、条の縦走する縄文。この図がまさにそうなのですが、縄文原体を斜めに回転させて、縄の条が縦に走る。⑧縄文の条が横に走るのも特徴です。

これは、今年の2月に白河市の鈴木功さんに案内していただいた際に撮った写真ですが、ここが天王山遺跡です。丘陵の上がそれほど広くはないのですけれども、平地が広がっている場所から、1950年・1951年に大量の天王山式土器が出土しました。

これは『地図で見る東日本の古代』という本から引用した地図なのですが、この赤いのが古代の官道で、この部分が天王山遺跡です。この南側に阿武隈川が流れています。丘陵上にある遺跡に登って周囲を見ると、木が生い茂っていて見通しは決して良くはないのですが、四方を見ることができる場所で、交通の要衝にあたることがよくわかります。後ほど話をします古津八幡山遺跡も交通の要衝にありますので、すごくよく似たような立地だなと思いました。

・天王山遺跡の石器

それでは、天王山遺跡出土の天王山式土器をもう少し詳しく見てみたいと思います(スライド20)。

天王山式土器の話をする前に、少しだけ石器の話をする。これは30年程前に見せていただいた時に、木箱に入った状態で撮った石器ですが、石鏃と環状石器、こん棒の先端に付けるドーナツ状の石器です。石器はこれぐらいしかなかったように思います。石器が少ない、ほとんど使ってないことがわかります。

・縄文原体

少しだけ縄文原体のことについて触れさせていただきます。1979年に刊行された山内清男先生の『日本先史土器の縄紋』から引用した図です。簡単に説明しますと、縄の撚りには、右撚りと左撚りがあって、右撚りの次には左撚りにします。そうしないと撚りが戻ってしまいます。それからこのRとかLというのは、Rが右撚り、Lが左撚りという記号です。これは、先回の講演会で石川さんが撚った縄ですが、これが最も上に書いてあるLとかRとかという1段の撚りで、これをもう一回撚ると、LRとかRLという単節の撚りになります。天王山遺跡の天王山式土器の特徴は、RL縄文を斜めに回転させて、条が縦に走るもの。それから、この左下になるのですがLR縄文を斜めに回転させて、条が横に走るもの、その両方があるというのが特徴です。また、このRL縦走縄文というのは、以前から中村五郎さんが北方系の要素であると言われてはいますが、そのとおりだと思います。

・天王山式土器の文様

天王山式土器を写真で紹介するとこのようなものになります(スライド22)。交互刺突文というのはこういう部分ですね。沈線を引いて、その上と下に交互に刺突を入れていく。あとそれと、今日、後半に話をする予定ですが、実は天王山遺跡の中には、古い要素を持った土器がいくつかあります。この上の写真です(スライド23)。厳密に言うと、2本同時に

施文しているかはっきりしないのですが、このような2本の沈線で弧線状、連弧状の沈線を入れるものがいくつか認められます(スライド23)。

それから下の土器は、東関東系、主に茨城県北部のひたちなか市周辺に系譜を求められる外来系土器です。これらは、東関東の土器編年で言うと、後期初めではなく、後期前半の新しい段階に位置付けられるものです。東関東では最初は2本描の施文具で文様が描かれるのですが、新しくなると3本・4本描きと多条になってきます。これらの新しい段階の東関東系土器が天王山遺跡で一緒に出土しているので、天王山遺跡の天王山式土器というのは後期初頭ではなく、後期前半の新しい段階に併行するだろうというのが、東関東系土器の編年から言えると考えています。東関東系土器に着目している多くの人はそのように考えているのではないかと思います。

天王山遺跡出土の土器を、1958年に刊行された『弥生式土器集成』に掲載された番号順に並べた図です(スライド20・24・25)。おおむね壺形土器が最初に来て、その後に甕形土器が並んでいるのですが、それを先程の8つの特徴の番号を付けて色分けをした図になります。これを見ると、④と⑤と⑧というのがどうも組になる場合が多いようです。④頸部無文帯、⑤磨消縄文、⑧横走るL R縄文です。この組み合わせが天王山遺跡の天王山式土器の特徴の一つと言えらると思います。天王山遺跡出土の土器がすべて該当するという意味ではなく、特徴の一つとしてこういう組み合わせが認められるということです。壺も甕もそうです。

あとそれからすこしだけ補足をします。(スライド25) 28・29の甕形土器を見て下さい。この実測図は半分しか文様が書かれていないので複雑な文様と思われるかもしれませんが、下のスケッチを見ていただくと、連弧文を基本にして、この中に補助的な文様をいろいろ付け足していることがわかると思います。一見複雑に見えますが、天王山遺跡の天王山式土器は、この連弧文が文様を施文する際の基本になっています。

天王山遺跡の天王山式土器の特徴を要約すると、まず、明確に文様帯が区分されていること。この前の講演会で石川さんが、文様帯毎に色分けをした図を示されましたね。頸部が2段に分かれていることでもあります。口縁部、頸部、それから胴部ですね。それから今話をしましたように、連弧文に由来する文様が多いということ。

あと、もう1つ重要な点は、後に詳しく説明をしますが、天王山遺跡天王山式土器の成立する以前に見られるような、1つの土器に、1つの文様帯に出自の異なる文様を入れることは決して有りません。天王山遺跡天王山式土器は文様を施文する際の規範・ルールが厳しく、そういう厳格な範型のもとでつくられていると考えています。

3. 古津八幡山遺跡

3_1 遺跡の概要

東の天王山遺跡に対して、西の古津八幡山遺跡という話をちょっとさせてください。今回、資料を作っていると2つの遺跡がすごくよく似ているなということに改めて感じました(スライド26)。古津八幡山遺跡の成立する時期は、弥生時代中期の資料は1点もないので、後期になってからであることは明らかです。天王山遺跡も一緒です。後期から後期の終末、それから古墳時代です。遺跡のある場所は、信濃川と阿賀野川が最も近接する場所で、信濃川沿いに南西に行くと信濃(長野県)、阿賀野川沿いに東に行くと会津(福島県)、そして日本海を南西に行くと北陸、北東に行くと山形県・秋田県に行けるという交通の要衝に立地しています。

遺跡は丘陵上にあつて平野部からの比高差は50mぐらいあります。いわゆる高地性集落で、集落の周りを環濠が巡っている環濠集落でもあります。一般的には防禦を目的とした集落と考えられています。これまでに50棟以上、最近の調査で数が増えているので、60棟近い数だと思いますが、それぐらいの堅穴住居、堅穴建物が検出されています。

1つの遺構の中で系統の違う土器、縄文のついた東北系土器、縄文のつかない北陸系、それから両方の要素を合わせ持った折衷土器が一緒に出土しています。系統の異なる土器が遺構内から一緒に出ていることによって、それぞれの系統の違う土器が同時期に作られ、廃棄されたことがわかります。考古学者は遺跡・遺物の年代の尺度を主に土器編年で見るのですが、古津八幡山遺跡の調査成果は系統の異なる土器編年の併行関係を考える際の基準資料になっていると思います。

古津八幡山遺跡では、弥生時代が終わった後に150年ぐらいしてから、新潟県内最大規模の直径60mの円墳が造られています。弥生時代から古墳時代への移り変わりがわかる重要な遺跡として2005年に約12haが国の史跡になって、現在は復元整備がされて史跡公園として一般公開されています。

古津八幡山遺跡はここです(スライド27)。土器には東北系と北陸系、それから長野系がありますが、ちょうど東北系土器(天王山式土器)の分布圏のはずれに近い位置にあります。天王山遺跡も、あれだけまとまって天王山式土器が出ていますが、白河市の南からはほとんど出土していません。天王山式土器が主体的に分布する地図を作ると、太平洋側の分布圏の南のはずれに近い位置にあります。なぜ、分布圏の外殻圏に標識遺跡があって、あれだけ多くの土器が出土しているのか不思議なのですが、そのような場所に2つの遺跡はあります。両遺跡は東北系土器の分布域のはずれに近い位置にある西と東の遺跡で、同じく丘陵の上にあるという共通点が見られます。天王山遺跡には環濠はないのでしょうか。半分冗談ですけども、可能性もあるのかなというふうに思っています。

現在、古津八幡山遺跡は史跡整備が進んで、毎年大勢の方々に来て下さっていますが、西方の日本海側には弥彦山とか角田山が見える眺望が利く丘陵上にあります。この写真も真上から見たものですが、古津八幡山古墳が一番北側に造られています。

3_2 遺構の重複関係と遺物の型式学的研究

次に、古津八幡山遺跡の土器編年が、今回話をする編年の基準になっていますので、その話をさせていただきます(スライド31)。

先ほどご説明したように、古津八幡山遺跡では、北陸系土器といわれる天王山式という東北系土器が遺構内で一緒に出ています。一緒に出土していない場合でも、遺構の重複関係から出土遺物の新旧関係を判断する事ができます。

代表的な例を3つ紹介させていただきます。北東斜面にある外環濠が造られた後にその外側に、方形周溝墓という墓が2基造られています。環濠は、古津八幡山遺跡では土塁が外側に造られています。この土塁が崩れたと思われる土が、その外側の方形周溝墓の周溝に堆積しています。このようなことから、環濠と方形周溝墓の前後(新旧)関係を確認できると考えています。

古津八幡山遺跡の全体図です(スライド32)、水色が環濠、ここが古津八幡山古墳で、緑色が竪穴住居です。今回紹介するのはこの場所です。右側の図が拡大したものです。

・環濠

水色が環濠で、環濠の外側に墓がつくられています。この環濠の大きさは、幅約2m、深さも深いと

ころでは2mぐらいです。外環濠Cの底面から約1mの場所から、上段の写真のような甕形土器が出土しています(スライド33)。この甕は、口縁部の伸びが短くて、断面形が三角形になっているのが特徴です。これは北陸編年の「猫橋式」土器で、後期前半に位置付けられる土器です(スライド5)。この土器の編年的な位置づけから、少なくとも後期前半、猫橋式の段階に、古津八幡山遺跡では環濠が掘られていると考えています。北陸では後期後半の環濠が多いので、北陸の中でも比較的古い環濠ということになるかと思えます。

イメージ図ではこの様になります。これは環濠とその後造られたお墓を一緒に示したものですが、上が環濠の土塁で、環濠の外側、斜面の下側に2基の方形周溝墓が造られています。墓の周りに溝があって、その周溝を掘った土を中央に盛りあげてマウンドにしています。2基あって、方形周溝墓1・方形周溝墓2としていますが、方形周溝墓1が先につくられて、方形周溝墓2が後に造られます。中間にある溝を共有する形で、1と2が順々に造られています。

・方形周溝墓1

方形周溝墓1は、中央に棺を納める埋葬施設があり、その中から鉄剣と石鏃が見つかっています(スライド38)。鉄剣は鹿角の柄がついた鹿角装鉄剣、石鏃はえぐりがあり、ネイティブアメリカンが作ったものとよく似ていることからアメリカ式石鏃と言われているものです。

ここから出た土器がこれになりますが、すべていわゆる東北系、天王山式土器で、1点だけ八幡山式と言っていますけれども、縄文の付かない折衷土器が出土しています(スライド40)。これらは、天王山遺跡出土の天王山式土器とほぼ同じ頃のものだろうと考えている一群です。これが鉄剣と石鏃です(スライド41)。少し蛇足になりますが、古津八幡山遺跡から出土した石器はこれぐらいしかありません。定型的な石器は石鏃・石斧と砥石だけです。古津八幡山遺跡でもほとんど石器を使っていないということが、これでお解りいただけるのではないかと思います。

・方形周溝墓2

もう1基、方形周溝墓2としたお墓について説明します。周溝の中に流れ込んで堆積した環濠の土塁の土が、断面写真の黄色い土です(スライド42)。これは環濠を掘削した際に、底面から中程に見られた

土です。それが周溝に堆積しているということは、環濠が掘られて、ある程度時間が経過してから盛られた土塁が崩れて、周溝の中に堆積したということを示していると考えています。周溝からは、下の写真のように良好な状態で弥生土器が出土しました。完形に復元できるものが多かったのですが（スライド43）、先ほどの外環濠C出土の土器に比べると、口縁部の伸びが長くなっている新しい様相で、後期前半ではなく、それよりも新しい後期後半に相当するものと考えられます。北陸編年の「法仏式」の古い段階に位置付けられるものです。外環濠Cと方形周溝墓の新旧関係と土器編年が合致しています。外環濠Cと方形周溝墓2の重複関係、方形周溝墓1と2の新旧関係をまとめると、外環濠C→方形周溝墓1→方形周溝墓2という序列になると考えられます（スライド5）。

古津八幡山遺跡では、ほかにも北陸系土器と東北系土器が一緒に出ている遺構がたくさんありますが1つだけご紹介いたします。竪穴住居で共伴した事例です。右側の土器がヘラ状工具で文様を描いた東北系土器で、左側が北陸系土器です。このように竪穴住居内から一緒に出てくるということで、天王山式土器と北陸系土器が共伴関係にあるということが間違いないと、古津八幡山遺跡の調査成果では言えると思います。

これまでご紹介した資料は、後期前半でも新しい段階ですが、それより古い段階の資料がどのくらいあるか集めたものです（スライド45）。この辺が今日の話の主題になります。

4. 弥生時代中期後半から後期初頭の土器について

（スライド47）今まで主に話をしてきたのは、後期前半の後半段階ですが、これから話をするのは、中期後半終末のことになります。そして最後に今回の本題である後期前半の初め頃の話をしします。こだわらなきゃみんな一緒だって言われそうですが、ちょっとこだわりがあるのです。話をする順番がわかりにくくて申し訳ありません。

・山草荷遺跡

まず、中期後半にどのような土器が作られているのか見たいと思います。類似するものが後期前半の土器と一緒に出ることが多いので簡単に説明をします。

新発田市山草荷遺跡、阿賀野川以北にある中期後半の標式遺跡です（スライド47）。新潟県内の弥生時代の遺跡では地域によって多少はありますが、どこ

でも多地域の土器が一緒に出土する傾向にあります。北陸系・長野系、それから東北の会津系・秋田系土器が一緒に出土しているのがこの遺跡の特徴です。今日の主題はこの赤字で書いた東北系土器です。会津系の川原町口式土器、それから秋田系の宇津ノ台式土器です。写真はこちらになります（スライド48）。下段が会津で出土しているものと似ている土器ですが、1本の沈線もしくは、2本沈線（平行沈線）で渦巻文・同心円文・山形文・菱形の文様などを描いているものです。それから上の秋田系と書いたものは厳密に言うと秋田の土器ではなくて、新潟県の主として阿賀野川以北で変容した土器です。左側の甕形土器のように、3本描の施文具で直線文・波状文や鋸歯状の文様を描いています。このように2本描とか3本描施文具を使っているのが中期後半の土器の特徴になります（スライド49）。

図が小さくて見にくいと思うのですが（スライド50）、同じような施文具で文様を描く土器というのは、決して新潟県だけではなくて、宮城県・福島県・山形県、それから岩手県の南部、今の奥州市付近ですが、この地域でも見られます。右側の奥州市常盤広町遺跡の事例は、2本描沈線で文様を描いた2点とそのほかの天王山式系土器の古い段階の資料です。奥州市付近では2本描沈線で文様を入れたものと天王山式系列土器の古い段階の土器が一緒に出土しています。

私共のように考古学者は地域毎に細かく分けるのですが、中期後半に岩手県の南部から宮城県・福島県・山形県・新潟県・東関東にかけて広域に、この平行沈線文系土器が分布しているというのが、巨視的な目で見ただけの特徴と言えらると思います。これから話をする内容につながりますが、平行沈線文系土器の要素を残す天王山式系列土器は古い、後期初頭の土器であると考えています。

・平行沈線文系土器

実は約30年前に宮城県で天王山式土器の研究会がありました。私もちょうどその頃に天王山式土器の勉強を始めていたので参加しましたし、会場には中村五郎さん、石川日出志さんも発表者として参加されていたと記憶しています。平行沈線文系土器と天王山式系土器の関係性については、この研究会で宮城県の研究者（佐藤信行さんと相澤清利さん）が注目していたのを印象深く記憶しています。その後、宮城県内ではこのような視点で研究が継続されてきたのですが、新潟県や福島県会津地域ではなぜかこ

ういった視点による研究がなかったように感じています。それで今回、あらためてこの点に着目して資料を見直してみようというのが、企画展のきっかけの一つです。

これにはある理由があって、石川日出志さんが、岩手県の別の平行沈線文系土器（2本描沈線文）に着目をし、2本描沈線文は古くない（新しい）ということ論文で書かれて（湯舟沢式）、皆がそれに引きずられたのではないかと思っています。誤解・誤読だったのかもしれませんが、宮城県では古い様相の天王山式系列土器であると言っているのに、石川さんが2本描沈線文を新しいと書いていることが理解できなくて30年近く経ってしまったと反省しています。私の不勉強が原因だったのかもしれませんが、このことにこだわっていて、長い間論文を書けなかったのかなと思っています。今では石川日出志編年の軛が外れたという感じです。

■後期初頭から前半の弥生土器

それでは、これから平行沈線文系土器に伴う天王山式系列土器群、平行沈線文系土器の要素を持った天王山式系列土器は古いという視点で見たいと思います。時期的には後期初頭から前半と考えています。

まず、交互刺突文について見てみたいと思います（スライド51）。この中で、まっとうな交互刺突文は右側の天王山遺跡の交互刺突文だけです。口縁部の下の部分にあります。沈線を2条引いて上下交互に刺突を入れています。ほかは、厳密に言うと交互にはなっていない擬似交互刺突文です。口縁部の肥厚した部分に横位沈線を1条ないし2条引いて、縦に刻みを入れたり、下から押し上げたりすることによって、この部分が交互刺突状になっているものです。これらがこの段階-後期初頭-の特徴的な擬似交互刺突文です。

最下段は、村上市砂山遺跡の資料ですが、文様帯の境界の部分に三角形や台形状の刻みを入れています。右側の一例だけ上下から入っていますが、これらも後期前半の天王山遺跡以前の天王山式系列土器の特徴の一つです。

交互刺突文で古いもの、新しいものを分けることはできないという研究者もいますが、これらは明らかに古い要素です。中段中央の例は口縁部に2本描沈線で連弧文を入れています。この施文具は中期後半の伝統を引くものです。

■岩手県南部における中期末・後期初頭の様相

類似するものを遺跡単位で見たいと思います。これは岩手県南部の奥州市兎Ⅱ遺跡という著名な遺跡の土器です（スライド52）。交互刺突文の特徴は、口縁の肥厚部分に横位沈線を引いた後に、下から押し上げて擬似交互刺突文を作っています。更に横位沈線の上に、縦位の刻み・沈線を入れています。研究者の間で「兎Ⅱタイプの交互刺突文」と言われているもので、この遺跡では2本描施文具による平行沈線文系土器が伴っていて、平行沈線文と交互刺突文が1つの土器と一緒に入れられている土器もあります。

次に、紹介するのは同じく奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡と北田Ⅱ遺跡の土器です（スライド53・54）。ここでも兎Ⅱ遺跡と同じような交互刺突文があります。口縁部や頸部に2本描施文具で連弧文を入れるものなど、2本描施文具で文様を入れた土器が多く見られます。この時期の特徴はもう1つあって、縄文を施文するとき、一回縛ったもの、結節縄文と言いますけれども、そういうものが多く見られるということです。これも弥生時代中期後半によく見られる手法ですが、それを引き継いでいると考えられます。北田Ⅱ遺跡の中段の土器は、この結節縄文が波状沈線に代わったものです（スライド54）。同じように結節縄文を沈線に置き換える手法は弥生時代前期にもありますが、時期を超えて同じようなことをしていることがわかります。よって、これらによく似た押し引き状やジグザク状の沈線も後期前半の文様要素のひとつと考えています。

■会津地域における中期末・後期初頭の様相

企画展で展示している福島県会津美里町の油田遺跡の土器です（スライド55）。これらは中村五郎さんが注目されて資料報告をされていますが、主に2本描施文具で上向き連弧文を入れているのが特徴です。会津では今までに類例が少なく、ほとんど注目されていなかった一群です。右下の2点の擬似交互刺突文も一見複雑そうに見えますが、この前に説明をしたものと同じ様に横位沈線を引いて、縦に刻みを入れるだけのもので、後期の古い施文手法と考えられるものです。福島県の中期後半の土器の文様には、基本的にこのような単純な連弧文は少なく、渦文・同心円文や四角形・山形の文様が一般的なもので、そこには直接系譜が追えない一群であると考えています。施文は2本描で中期後半の伝統を引いてはいるけども、文様そのものは在地の中期後半から追うことはできないので、今の時点では系統が不明

と言わざるをえません。これから勉強していきたいと考えています。比較的単純な文様で見過ごされやすいのですが、似たような文様は新潟県内でもパラパラあるように思われます。

今まで会津地域で天王山式土器と言われているものを見直していくと、2本描沈線で連弧文を描いたり、鋸歯文を描いたりするものがあります。この土器群だけで一時期の組成をなしていたということでは決してないと思いますが、このような古い要素を持つ一群があるということに注視する必要があると考えています(スライド56)。それと、天王山遺跡と同じように口縁部が肥厚して、内湾する器形の土器もありますが、単純に口縁部がくの字状にくびれて肥厚しない甕もあり、入れられる文様は連弧文が一般的です。この写真右下の土器は、先ほど説明した結節縄文が沈線に転化したと考えられるものなので、ここに示したような一群が、天王山式系列土器でも古い段階の資料と言えるのではないかと考えています。

5. 弥生土器からみた北陸と北海道南部・東北部との交流

5_1 北陸-富山県・石川県-における天王山式系列土器群

次に、今ほど説明をしたこれらの後期初頭から前半に位置づけられる土器と一緒に出土している変な?土器について紹介させていただきます。これから話をする天王山遺跡の天王山式土器よりも古い段階に位置付けられる土器が今日の本題になります。

北陸の話をもっと詳しく(スライド57)。在地の北陸系土器には沈線文様や縄文は入れないので、北陸では極めて特異な外来系の土器になります。このような天王山式系列土器が北陸の富山県・石川県で出土しています(スライド58)。多くは天王山遺跡の天王山式土器よりも古い段階のもので、破片ばかりで大変にわかりにくいと思いますが、菱形の文様-重菱形文-が多く用いられています。天王山式系列土器が見つかる遺跡は、富山県で36遺跡、石川県で40遺跡あって、この中で重菱形文系土器は富山県15遺跡、石川県13遺跡で、重菱形文を入れる土器の比率が高いと言えます。

5_2 北陸における天王山式系列土器群の特徴と系譜

(スライド57)あとそれから、重菱形文のほかに気になっているのは、冒頭で話をした小さな連弧文を頸部に入れるもの、それからもう1つは、縦位鋸歯

文です。これは富山県高岡市下老子笹川遺跡の土器ですが、ジグザグの鋸歯文が胴部に縦に入っています。右の青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡の土器と同じような文様です。新潟でも事例が多くない、無いわけではないのですが、そういう文様が、東北北部から遠く離れた富山県で出土している。石川でもありますが、資料調査に行ったら驚いたことの1つです。

あとそれと、頸部に重菱形文入れた土器の下にS字状の文様とか、大きな山形文を入れるもの、それから、言葉が適切かわかりませんが、円形と台形を結びつけたような文様を入れた土器があります。これから詳しく話をしますが、こういう土器が富山県や石川県で多く見つかるということなんです。

今、このような文様を入れた土器が、遠く青森県にもあるという話をしましたが、富山県下老子笹川遺跡の土器は(スライド57)、北海道の恵山式土器と非常によく似ており、それらを模倣してつくられたと考えられています。東北北部・北海道南部との交流は、このような遺物が出土しているということからも裏付けられると思います。これらは、天王山遺跡の天王山式土器には見られない特徴であるという点が重要なことだと考えています。

富山県・石川県の天王山式系列土器の分布図です。石川県で特に多いのは能登半島の邑知潟地溝帯一帯。七尾湾から羽咋市にかけて断層があるのですが、この地域の分布が濃密です。国指定史跡の七尾市万行遺跡からも出土しています。ずっと北から船に乗ってやって来た北方系の人たちが七尾湾に入って、内水面を利用して邑知潟地溝帯に沿って南下していったのではないかと想像したくなります。

5_3 口頸部間(口縁部頸部間)小連弧文の系譜

これは北陸で出土した天王山式系列土器の中で特徴的なものを抽出した図です(スライド60)。図の◀印の部分が、頸部の一部に入れられた連弧文で、「口頸部間小連弧文」と仮称しているものです。最初は何でこんな変な場所に連弧文を入れるのだろうと思いました。冒頭にも話しましたが、天王山遺跡では決して見られない文様です。新潟県内でも類例がないわけではないのですが、今まで新潟県内では気にも留めていませんでした。

北陸に資料調査に行った後、気になって調べ直してみたら、むしろ青森県とか秋田県などにあることがわかりました(スライド61)。天王山遺跡の天王山

式土器よりも古い特徴を持っている傾向があるように思いました。この青森市蛭沢遺跡の例は小連弧文をたくさん入れています。実測図だけを見るとちょっと見落としそうですが、右側の拓本を見ると下半に渦巻文が入っています。これは中期後半によく用いられる文様です。青森県六ヶ所村家ノ前遺跡の壺は頸部に連弧文ではなく鋸歯文を入れています。秋田県山本郡三種町館の上遺跡も頸部を無文にせず、連弧文を入れています。長岡市松ノ脇遺跡の甕は、頸部下半に重菱形文由来の文様を入れ、口頸部間に小連弧文を2条入れています。天王山遺跡では口頸部間を無文にするのが基本ルールだったと、先ほど説明しましたが、これらは天王山式土器のルールに則らない一群ということ。時間がありませんので、詳細は省略しますが、これらには古い特徴を持っているものが多いように思います。編年的に言うと天王山遺跡の天王山式土器よりも古く位置づけられそうな一群が、北陸から日本海側一円に見られるということです。

5_4 上胴部山形文の系譜

あともう1つ、上胴部山形文とした文様です。初めに気になったのは、新潟市東区の新潟北高校近くにある石動遺跡の土器を見た時のことです（スライド62）。左側が土器破片の実測図で、右下にイラストと写真を載せています。口縁部が内湾状になり比較的長く、口縁部下端には小連弧文を入れ、その下の頸部に重菱形文を入れています。注目してもらいたいのはその下の文様です。2本の沈線で書かれた山形の沈線文様が特徴ですが、その沈線に沿ってクネクネという変な波形の沈線を入れています。そして、山形沈線文の中にもう1つ山形を入れています。これは天王山遺跡でもよく見られる特徴です。これを見た時に「ああ、面白い土器だな」と思って、この系統の文様はどういう所に分布しているのかなということを調べたわけです。

これがそれですが（スライド63）、小さいので、お手元にお配りしてあるA4資料を御覧ください（追加資料5）。よく似たものを探すと、北海道久遠郡せたな町瀬棚南川遺跡、これは日本海に面した遺跡です。あと函館市恵山貝塚、これは恵山式の標式遺跡です。それから、石川日出志さん資料報告された亀田郡七飯高校遺跡、細かく言うと文様は少し違いますが、同じように口頸部間に連弧文を入れて、頸部の下に山形文とか連弧文を入れています。類似し

た文様が、青森県とか福島県河沼郡会津坂下町館ノ内遺跡でも出ています。小破片ですが比較的日本海に近い場所にある胎内市兵衛遺跡、新発田市王子山遺跡のものもそうです。館ノ内遺跡では重菱形文の下の文様は異なりますが、連弧文に沿って鋸歯状の沈線を入れています。口縁部の形状が石動遺跡とよく似ており、同じ系統の土器であるということがよくわかるのではないかと思います。この様に、類似した文様を入れた土器が遠方にもあるので、人の往来があったことが推察されます。

これは、実測図をイラストにしたものです（スライド64）。石動遺跡を中央に配置すると3例の関係がよくわかります。石動遺跡は石川県中能登町大槻3号墳に近いし、館ノ内遺跡ともよく似ています。石動遺跡と大槻3号墳の山形文は内部に入れられた山形の端部を丸く処理する手法も含めてそっくりです。石動遺跡と館ノ内遺跡は口縁部の形そっくりです。口縁端部に縦の刻みを入れる手法は北方系の様相なのですが、このような北方系要素を持った土器が広範囲で分布していることになります。

大槻3号墳は最初に見たときに、古いのか新しいのかわからなかった。最初に申しましたように口頸部間の小連弧文も含めて、変な土器だなと思ったのですがこのように比較資料と対峙して見ると、同じ時期で良いと思うようになりました。（厳密な共伴関係は不明だが）一緒に出土している後期前半の北陸系高杯に伴って良いものかなと思っています。

・桜町遺跡

本来的には日本海側特有の後期前半の土器に入れられた文様と考えていますが、会津にある福島県湯川村桜町遺跡の天王山遺跡の天王山式段階よりも新しい後期後半と言われている資料にも類似した文様があり注目されます。胴部上半に斜線を引き、それに沿って鋸歯状の沈線が入っています。

蛇足ですが、少しだけ後期後半の話をしませ（スライド65）。胴部上半の山形文に沿って鋸歯状文を入れるという点でこの一群に似ていると考える土器です。実は、鋸歯状文に着目すると、同じ会津の会津坂下町館ノ内遺跡とか柏崎市西谷遺跡で区画文の中に鋸歯文・波状文を入れた土器が出土しています。桜町遺跡の鋸歯文もこれらの系統を引く可能性があるのですが、気になっているのは、これらが頸部を無文にしていないという点です。天王山遺跡の天王山式土器は頸部を無文にするルールがあったはずなのに、館ノ内遺跡・西谷遺跡、そしてその系譜を引

くと考えられる桜町遺跡も頸部を無文にしていなかったり、本来は上胴部に入れられるべき連弧文が、その上の文様帯に入れられていたりしている現象です。現段階ではあくまでも想像なのですが、天王山遺跡の天王山式土器とは別の系列があって、場合によっては北陸などのキメラ土器の影響があって、頸部文様帯を無文にせず、文様を施文するようになったのではないかと考えています。今日話す内容と時期が違いますが、少しだけ話をさせていただきました。

桜町遺跡は、弥生時代の後期後半が主体の遺跡で、そのころになると北陸系の土器、それから北陸系の住居形態とか、方形周溝墓とか前方後方形周溝墓という墓制が入ってきます。北陸系の集団がおそらく古津八幡山遺跡などを經由して、どっと会津に流入していく時期です。その時に本来の北陸系の集団だけではなくて、北陸系の集団の中にいた天王山式系列土器を作っていた人たちの末裔も会津に行ったのかなあ？などということ、ちょっと想像をたくましくして考えたりしました。あくまで土器文様からの空想です。これからもっと勉強していかなきゃ駄目なのですが、そのような見方もあるということで、ちょっと紹介をさせてもらいました。

6. 東日本に広域に分布する文様

6_1 S字状連繋文の系譜

これから話をするのは、もう少し広域に見られる文様についてです（スライド66）。まず、私が「S字状連繋文」と仮称している文様について説明します。追加資料6_1と書いてあるものです。白黒の集成図もあわせてご覧ください。スライド右側の図です（スライド67）。概ね北から南に、北海道・青森県・岩手県・秋田県・福島県・富山県・新潟県・長野県・群馬県の順番に並べてあります。S字状の文様が左右に連結して、その連結部分の右上・左下に三角形の文様（補助文）が向かいあわせに描かれています。補助文は▷印をつけた部分です。同じ系譜を引くと考えられる様々な文様がありますが、祖形は青森県南東部の八戸周辺から岩手県北東部から宮古市・陸前高田市付近の遺跡から出土している文様ではないかと考えています。なかでも、岩手県の九戸郡野田村上代川遺跡や宮古市田鎖車堂遺跡では、この文様が様々な器種に入れられています。石川日出志さんの説では、弥生時代中期の波状工字文に錨形文の要素が加わって、S字状連繋文が成立したのではないかと考えられます。

この文様の特徴は、左右にS字が連繋していくのに沿って、斜に向かいあわせの三角形の補助文が付けられていることです。元来、波状工字文の段階にはなかったのですが、文様として確立した際に付けられ、その後に省略されていったと考えています。2本線で描いていたS字が、3本線になっているものがありますが、これは三角形の補助文の名残だろうと思います。この系譜の文様は広域で出土していて、特に福島県会津坂下町能登遺跡や会津若松市和泉遺跡で多く見つかっています。福島県では壺形土器に限られることが特徴です。

繰り返しになりますが、分布図で遺跡を示しているように、この一群は青森県南東部、八戸周辺、それから岩手県三陸沿岸、宮古付近に古いものがある、日本海側に行くと、新潟県、それから富山県・長野県それから群馬県と非常に広域に分布しているということです。

次に集成図に付加的な文様と書いた●印がついた文様について説明します。福島県能登遺跡の壺形土器の連弧文、群馬県高崎市長根安坪遺跡の連弧文、福島県会津坂下町開津台畑遺跡の波状文などです。実測図よりもわかりやすいので、イラストを見てください（スライド68）。イラストの◀印を付けている部分です。能登遺跡の壺の下向連弧文、長根安坪遺跡の広口壺の下向連弧文は共に無文の頸部の下に入れています。天王山遺跡の天王山式土器の特徴として上胴部の連弧文が特徴であると説明しましたが、これらが同じ文様帯になります。本来であればこれで完結する文様なのに（頸部無文+上胴部下向連弧文）、敢えてその下にS字状連繋文を入れていきます。これを「+aの文様」としてはいますが、余分な文様なのではないかと考えます。両者のS字状連繋文は三角形の補助文が欠落しており、新しい様相の文様と考えられます。

左下は長野市吉田高校グランド遺跡の土器です。これは頸部に重菱形文を入れ、その下にS字状連繋文を入れているのですが、よく似た文様の組み合わせが富山県氷見市加納谷内遺跡でも出土しています（資料6_1）。吉田高校グランド遺跡土器は、長野県内で唯一の重菱形文系土器ですが、重菱形文+S字状連繋文を考えると北陸ルートの可能性が高いのではないかと考えています。長根安坪遺跡へ繋がるルートでしょう。このような「+aの文様」原理が、先に説明した「キメラ」です。富山県下老子笹川遺跡・新潟市石動遺跡など甕や広口壺の上胴部にS字

状連繫文が入られる場合にはキメラ化している場合が多いようです。東北部に多い鉢形土器の場合は違いますが、東北部や北陸で壺や甕にS字状連繫文が入られる場合は、上記のような付加的に入れられた文様になっている例が一般的です。もともとの土器に、北方系？由来の文様が付加的に入れられたと考えています。

S字状連繫文の集成図に▶印を入れた部分が交互刺突文・擬似交互刺突文ですが、これらと補助文は伴わない傾向にあるようです。言い方を変えれば、交互刺突文を入れる段階には既に補助文が変容し、省略されている傾向にあるということです。編年的には天王山遺跡の天王山式土器の前、後期前半以前に主体を持つ文様と言えるのではないのでしょうか。岩手県宮古市和井内東遺跡の壺形土器頸部下端の台形状刻み（擬似交互刺突文）は、砂山遺跡のものに類似しており、後期前半の典型事例と考えられます。

S字状連繫文の伝播ルートは明確ではありませんが、岩手県宮古市田鎖車堂遺跡では各地域の土器が出土しており、大変に興味深く思います。

右側の写真は田鎖車堂前遺跡の土器です（スライド67）。上段は集成図にも載せているS字状連繫文の仲間です。これらは中期後半と考えられる例ですが、この遺跡からは中期後半の各地域に由来する平行沈線文系土器や、波状工字文、重菱形文、重菱形文の下に砂山遺跡のような三角形の刺突を入れている土器が出土しています。在地ではない他地域（多地域）に由来する土器が数多く出土しており、中期後半段階に広域に人の移動があったことを示す貴重な資料です。このような社会背景のもとで、S字状連繫文も拡散していったのではないかと考えています。

6_2 「円台形連結文」の系譜 六地山遺跡の円台形連結文の系譜と分布

（スライド67）最後に、最初に話をした六地山遺跡の土器について話をさせてもらいます。六地山遺跡はこの近く、新潟市西区にある海岸沿いの遺跡です。天王山式土器の編年の位置を考える上で、極めて重要な鍵を握っている遺跡です。この遺跡で、北陸系土器と東北系土器が、伴うのか伴わないのか、伴うにしても、伴わないにしても、時期はいつなのかということです。北陸系の土器については、今日来られているお二方で考えが異なり、中村さんは伴う、石川さんは伴わないとお考えのようです。新潟県内の遺跡では別系統の土器と一緒に出土することが多いですが、特に六地山遺跡は広域編年を確定する上

で重要な遺跡であると考えています。

私は今回、再報告で「伴う」と考察を書きました。お二方とも、北陸系の土器について後期前半（畿内第V様式）の資料であるという点は、私と概ね同じ見解なのですが、私とは東北系の土器の扱い方が異なり、お二人とも天王山遺跡の天王山式土器よりも新しいと考えられています。

中村さんは、六地山遺跡の畿内第V様式に併行する北陸系土器を根拠に、それよりも古いと考えている天王山式土器を畿内第IV様式併行とする根拠の1つにしています。また、会津坂下町開津台畑遺跡でも（中村さんが畿内第IV様式併行と考える）北陸系の櫛描文土器が伴ったと主張されています。一方、石川日出志さんは東北系土器と北陸系土器は伴わないと考え、本来、六地山遺跡の東北系土器に伴う北陸系土器は後期後半であるとしています。

年報の中では色々考察を書きましたが、今日は詳細な説明をする時間がないので簡単に話をさせていただきます。まず、六地山遺跡の編年の位置を確定する上で鍵を握る資料はこの甕形土器ではないかと思えます（スライド69・71・追加資料6_3）。

特徴を少しかいつまんで話をさせていただきますと、形は甕形土器です。少し内湾した口縁部が肥厚して、その肥厚した口縁部の下端部分が下向きの連弧状になり、交点に刺突を入れています。そして、その部分に縄文の側面を連弧状に押しつけています。その縄文はRLという北方系の原体が使われています。縄文の施文方法は、肥厚した口縁部が横走、その下が縦走、胴部の上方から下半にかけては、縄を斜めに転がして条が縦走する。天王山遺跡にもあった特徴だと思えます。そして、胴部の最上段だけ縄文を斜めに置いて、条を横走させているというのが大雑把な特徴になります。

まず口縁部です。口縁部下端に下向連弧文を入れ、頂部に刺突を入れる技法は基本的には天王山遺跡天王山式土器よりも新しい段階には見られない技法です。これは砂山遺跡ですけれども、似たやり方をしている。これは滝ノ前遺跡です。天王山遺跡の36（スライド16）もこれも近い手法だと思えます（スライド71）。

問題はこの真ん中の文様帯です。私は仮称「円台形連結文」の変容形と考えていますが、このような文様が入って、中に縄文を施文している。一般的には磨消縄文といいますが、この土器は後から縄文を充填しています。

解釈がとても難しいのですが、これは能登遺跡にある2点の土器の文様が合体してつくられた文様と理解をしています。これも天王山遺跡天王山式土器には一般的にはない構図です。いずれも連弧文に由来しない文様です。先に説明したように天王山遺跡天王山式よりも古い一群であると考えています。

それからこの下の部分に、つながった上向連弧文(連結上向連弧文)を入れている、という特徴があります。先ほど説明をしましたように、天王山遺跡の天王山式土器は、基本的には一つの文様帯の中に由来の異なる文様は入れません。だからこれは、イレギュラーなやり方です。本来であればこの文様(連結上向連弧文)は、ここではなくて胴部上半に入るべきものです。なぜここに入れなかったのかというのが重要だと思います。これは私の解釈ですけれども、最上段だけ斜めに施文し条を横走させ、その下は条を縦走させるとするのは、東北北部では一般的な流儀です。これをあえて表現をしたかったから、そこを塞ぎたくなかったから、本来ならばここに入れるべきこの文様(連結上向連弧文)をその上の文様帯に入れたのではないかと理解をしています。

前のスライドに戻りますが、六地山遺跡の右から2番目の土器も、2本描施文具で、上向きの連弧文を入れています(スライド70)。2本描施文具は先ほど説明したように、中期後半に多く用いられる施文具で、能登遺跡など後期の古い段階に用いられる施文具なので、ほかの資料を見ても、けっして天王山遺跡よりも新しい段階に位置づけられるものではないということです。

7. まとめ

それでは、これまで話をさせていただいた内容を要約してまとめにしたいと思います。

(スライド72:1) 後期前半の後半段階、新しい段階に白河市天王山遺跡が出現して、そこである厳しい規範のもとで天王山式土器が作られるようになります。

(スライド72:2) 天王山遺跡天王山式土器の編年的位置付けは、天王山遺跡における東関東系の土器の共伴事例、それから古津八幡山遺跡における北陸系土器との共伴事例から後期前半の新しい段階で間違いないと思います。

(スライド72:3) 天王山遺跡天王山式土器は、頸部の一部を無文にして、連弧文に由来する文様を入れて、磨消縄文が多く用いられます。そして一定の規範、ルールに基づいて作られているもので、一見す

ると複雑そうに見えますが、補助的な文様を取ってしまえば、連弧文に由来した比較的単純な文様であると思います。

(スライド72:4) 天王山遺跡天王山式土器が成立する以前には、中期末の平行沈線文系土器の要素を持った土器が作られるとともに、大槻3号墳のような山形文、それからS字状文連繋文など、似かよった文様を持った土器が広域に作られています。

(スライド72:5) 北陸では東北北部に由来する、口縁部と頸部間の小連弧文、それから上胴部の山形文、頸部の重菱形文などがあります。

(スライド72:6) 青森県三八上北地域とか三陸に由来するS字状連繋文はさらに広域に分布していて、福島県以南には頸部に別系統の文様を持つ土器の上胴部に入れられます。先ほど話をした加納谷内遺跡ですとか、吉田高校グランド遺跡のようなものです。(スライド72:7) 最後ですが、六地山遺跡の仮称「円台形連結文」を入れた甕形土器も、今説明しましたように、天王山遺跡天王山式土器以前になると考えられます。北陸系土器も東北系土器も共に後期前半に位置づけられると考えます。古津八幡山遺跡が出現し、外環濠Cが掘削され初めた頃です。白河市天王山遺跡が出現するのは、六地山遺跡の主要な時期の後半段階と考えられます。

新潟市内には、海岸沿いにある六地山遺跡、それから内陸の丘陵上にある古津八幡山遺跡という2つの弥生時代後期の遺跡がありますが、それぞれの遺跡がどのような時間的関係を持っていたのか、時期的に前後関係があるのかということが、お互いの遺跡を理解する上で、非常に重要だと思います。古津八幡山遺跡が成立する段階に、日本海を介して様々な影響があったと推察されますが、そのころに海岸沿いに立地している六地山遺跡が関わりを持った可能性が高かったのではないかと考えています。このことを推察する上でも、六地山遺跡の編年の位置・年代を明らかにする必要があるということです。

■エピローグ

今回の企画展で、弥生土器のスケッチをたくさん描いたので、ご覧いただきます。これがS字状連繋文と私が言っている仲間です(スライド73)。様々なものがありますが、能登遺跡・吉田高校グランド遺跡は先ほど話をしたように、補助文が省略されている文様だと思います。もともとは和井内東遺跡のように三角形の補助文が入るものが、省略・変容して3本沈線になる。

これも仮称「円台形連結文」というふうに私が言っている円形と台形が組み合わさったような文様です（スライド74）。これは砂山遺跡のような壺形土器の肩の部分によく入れられる文様です。円形と台形が組み合わさって連続していく文様ですが、様々な文様があるので、今後資料を集成し分析することによって、別の系統となるものを含んでいるのかもしれませんが。

これは先ほどから説明している山形文の仲間です（スライド75）。左側の青森県上北郡東北町楯遺跡は縄文が入っているので、ほかよりも時期的に古いと思いますけど、山形文に沿って入れられた鋸歯文が類似します。ほかは既にご紹介した3遺跡です。石川県大槻3号墳では、地元でつくられた在地の高杯と、東北系の要素が入った甕形土器と一緒に出土している重要な資料です。古津八幡山遺跡の方形周溝墓でも、多系統のものが一緒出土していますが、様々な地域の人がここに来て、一緒にお祭りをして、共立しているというイメージを彷彿とさせるような資料です。地元の人だけじゃなくて東北系の人も来て、亡くなった人、死者に対して一緒にお祭りをするような、そのようなイメージを、この土器がお墓から出ているということから想像することができます。

これは頸部に重菱形文が入れられた土器です（スライド76）。

展示解説の内容まで入れたくどい説明になってしまいました。何かまとまりのない話で申し訳ありませんでした。以上で終わりにいたします。ご静聴ありがとうございました。

注1：講演会では、一般の方々に分かりやすいようにと配慮し、中期・後期という言い方をしたが、中村五郎氏から曖昧であるご指摘を受けた。演者は、畿内第Ⅴ様式以後を後期、それ以前を中期とする立場をとっている。

講演会の途中で中村五郎氏の発言があったが、本人からの申し入れにより全て削除させていただいた。

注2：企画展で用いたイラストは全て、高橋美沙子さん（新潟市文化財センター）によるものである。

追加資料5・6_1・6_3：各報告書・論文より引用。秋田県狐崎遺跡の拓本は児玉準氏より提供を受けた。渡邊による実測図・拓本も使用している。

謝辞

企画展の開催に際しては下記の機関にお世話になりました。

会津美里町教育委員会・会津坂下町埋蔵文化財センター・群馬県埋蔵文化財センター・新発田市教育委員会・胎内市教育委員会・燕市教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・長岡市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター・南魚沼市教育委員会・福島県文化財センター白河館・福島県立博物館・村上市教育委員会

また、資料調査に際しては下記の機関にお世話になりました。

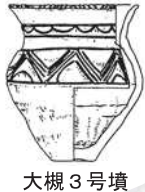
石川県埋蔵文化財センター・一戸町教育委員会・岩手県埋蔵文化財センター・えさし郷土文化館・奥州市埋蔵文化財センター・釜石市教育委員会・小坂町教育委員会・仙台市教育委員会・高岡市教育委員会・滝沢市埋蔵文化財センター・富山市埋蔵文化財センター・中能登町教育委員会・七尾市教育委員会・宮古市埋蔵文化財センター・湯川村教育委員会・六ヶ所村郷土館

石動遺跡の口頸部間小連弧文と上胴部山形文の系譜と分布



会津では唯一に近い重菱形文系土器。上胴部文様は連弧文であるが、沈線に沿う鋸歯文が共通する。口縁部縦スリット・頸部重菱形文・鋸歯文に日本海側からの影響が見える。

- ・上胴部の山形文に沿って、弧状や鋸歯状の文様を入れる。
- ・兵衛遺跡・王子山遺跡にも類例がある。
- ・内側の三角形の角がクルッと丸くなるクセが特徴で大槻3号墳でも同様。



大槻3号墳



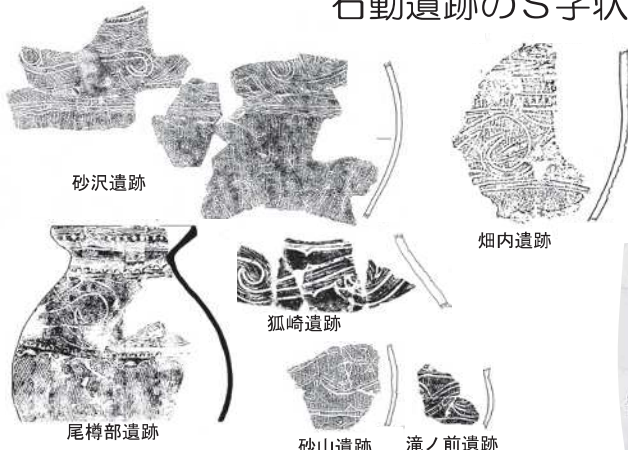
石動遺跡



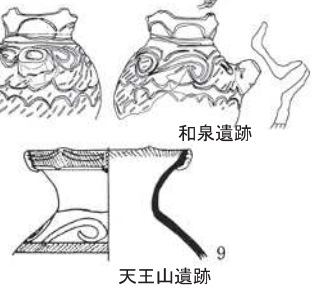
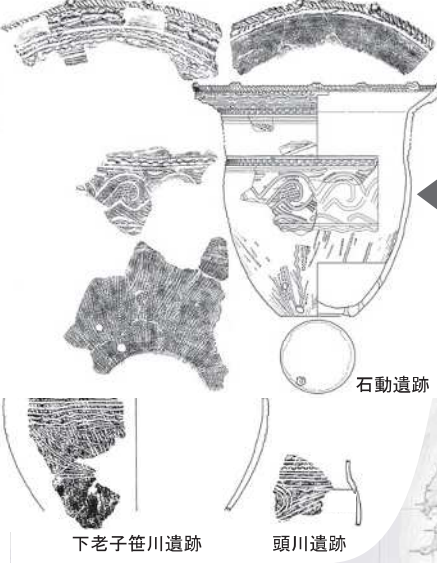
- ・小連弧文や波状文は、口縁部の縦スリット（キザミ）とともに北方系 続縄文式土器（恵山式）の影響を受けたもの。
- ・日本海を介して、弥生時代後期前半に北方系の要素が能登半島にまで伝わっていることがわかる。
- ※太平洋側には見られないので、日本海ルートであることがわかる。

1 : 700,000
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 キロメートル
この地図は、国土地理院発行50万分の1地方図「北海道Ⅰ」「北海道Ⅱ」「東北」「関東甲信越」「中部・近畿」を縮小編集したものである。

石動遺跡のS字状連繫文の系譜と分布



- 太平洋側の青森県八戸周辺～岩手県三陸沿岸の上代川遺跡や田鎮車堂前遺跡などでS字状連繫文の祖形と考えられる類例が多く見られる。これらの中には、S字状に入り組んだ上下左右に三角形の構図（補助文）が入る前の段階の例を含んでいる（中期中頃）。
- その後、田向冷水遺跡・上野遺跡・室浜遺跡・和井内東遺跡例のような三角形の構図（補助文）が入るようになる（中期後半～後期前半）。
- 開津台畑遺跡・能登遺跡の一部・吉田高校グランド遺跡例にはその名残があるが、能登遺跡の大形壺には三角形の構図は見られない。（3本目の沈線が名残か？）
- 加納谷内遺跡例は、三角形の補助文を欠くが、狐崎遺跡・砂山遺跡に似て各所に棘状の構図を入れている。太平洋側では和井内東遺跡に唯一見られる特徴である。
- S字状連繫文は元来は壺の上胸部に入れられる構図であるが、頸部に重菱形文を入れる例とキメラ現象をなし、甕上胸部にも入れられるようになると考えられる。



『天王山式土器からみた東日本の弥生社会—古津八幡山遺跡成立期の動向—』追加資料 6_1



- ▷ 補助文 (の字を挟んで斜め対角線上に入る三角形の構図)
- ▶ 交互刺突文 疑似交互刺突文
⇒ 交互刺突文と補助文は伴わない傾向にある
- 付加的な文様

S字状連繫文の仲間 S=1/8

『天王山式土器からみた東日本の弥生社会—古津八幡山遺跡成立期の動向—』追加資料 6_1

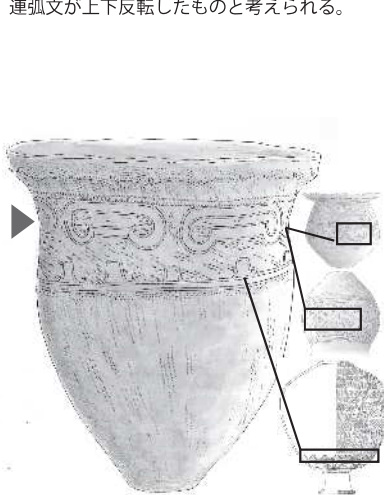
六地山遺跡の円台形連結文の系譜と分布



はりま館遺跡

六地山遺跡の甕の頸部に入れられた文様の系譜を辿ることは難しく、今まで、この土器の所属時期は後期後半と考えられてきた。しかし、口縁部の交点刺突下向連弧文は主に後期前半に見られる技法なので、この文様の系譜も後期前半にある構図の中から辿る必要がある。明確ではないが、円形と台形を組み合わせた「円台形連結文」が変容し、双頭渦文の影響を受けてできた構図ではないかと考えている。「円台形連結文」は砂山遺跡の大形壺のように、各地域で壺の上胸部文様として多用されている。

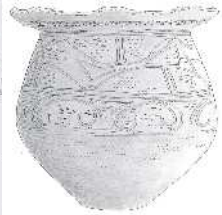
なお、頸部下端の構図は、後期前半に上胸部に入れられる、連結下向連弧文が上下反転したものと考えられる。



六地山遺跡



砂山遺跡



双頭渦文 能登遺跡



能登遺跡



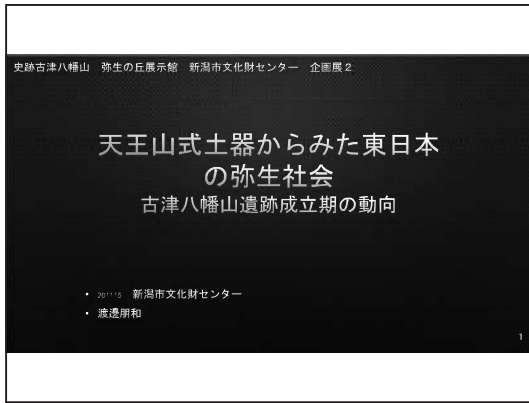
戸破若宮遺跡

大槻 3 号墳例の山形文が上下分離し、間に変容した円台形連結文を入れる

1 : 700,000

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 キロメートル

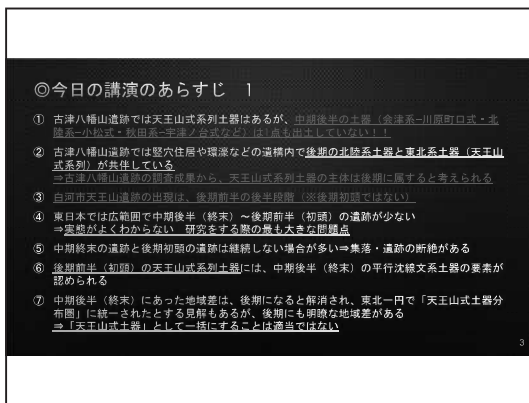
この地図は、国土地理院発行 50 万分の 1 地方図「北海道 1」「北海道 II」「東北」「関東甲信越」「中部・近畿」を縮小編集したものである。



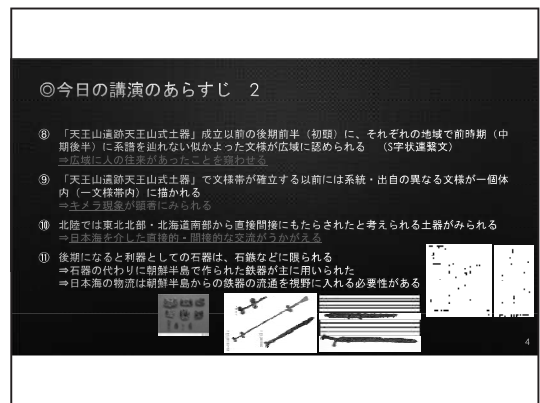
スライド 1



スライド 2



スライド 3



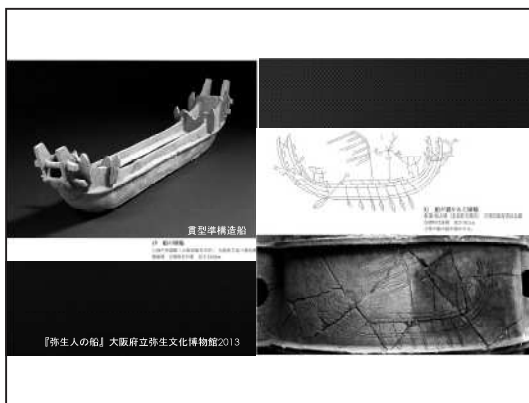
スライド 4

時期	北陸	長野	古津八幡山遺跡	大地山遺跡	砂山遺跡	金津	中道	東関東
中期後半	戸水B式	栗林式	—	△	●	油田Y		
後期前半 1	猫橋式	吉田式	—	△	●	和泉遺跡		東中根
後期前半 2	猫橋式	吉田式	外環壕C	△	●	能登遺跡		東中根
後期前半 3	猫橋式	吉田式	方形周溝溝基 1	○	●		天王山式古天王山式新	東中根
後期後半 1	法仏式	箱清水式	方形周溝溝基 2				明戸遺跡	十王台
後期後半 2	法仏式	箱清水式						
後期終末 1			●					
後期終末 2			●					

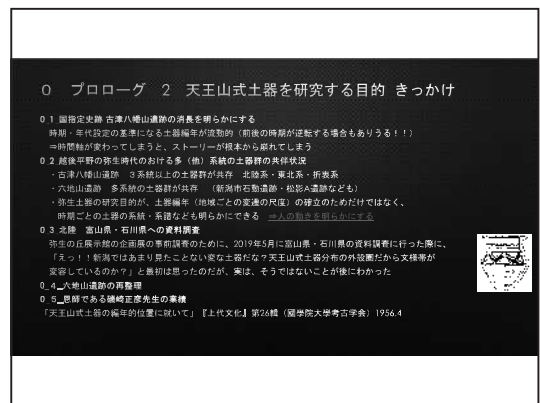
スライド 5



スライド 6



スライド 7



スライド 8

1 研究方法 1

1.1 研究対象時期

- 弥生時代中期中頃～後期終末、古墳時代初頭
- 天王山式土器前後の時期が研究対象

1.2 研究対象の特徴と制約

- 研究対象とする時期は、遺跡そのものが少なく、完形土器も少ない
- 断片資料までを研究対象としている（形になる土器だけを見てもわからない）
- 前の時期（中期後半）との連続性が少ない？ 看過されて来た
- 中期後半の地域性が解消され、所謂天王山式土器に画一化されたと考える研究者もいる

1.3 研究対象とする地域と、現在把握している遺跡数

北海道62、青森88、岩手147、宮城65、秋田38、山形52、福島213、茨城90、栃木、千葉
群馬、新潟213、富山36、石川40、福井 約1000遺跡を集成し、現在進行中・・・

スライド9

1 研究方法 2

1.4 遺跡・遺物の集成作業

- 報告書・論文など文献を見て、対象遺物が掲載されているか調べる
- 都道府県単位に遺跡管理番号を付けて、遺跡位置をグーグルアースプロに入れる (KMZ)
- 地理感のない他県では極めて有効 県単位・県内のエリア単位で把握する
- 土器図版をコピー・スキャンして、集成図を作成
- ⇒集成作業を行うことによって、地域を越えて類似する属性の把握が可能
- 土器の時期・特徴・系統を入れた集成表を作成 縄文原形 (R・L) の記録は必要不可欠
- 資料調査に行き、写真撮影を行い、可能な限り実測図を作成する・・・異なる収集網
- 高山泉、石川泉、新潟泉は9割以上調査済み、岩手泉は9割程度、福島泉・・・

1.5 型式学的研究、分布論的研究

- 型式学 器形や文様の変化・変遷を追う 型式・系統毎の集成・・・
- 分布論

スライド10


2 天王山遺跡 天王山式土器

2.1 天王山遺跡 (福島県白河市)


阿武隈川の北側にある独立丘陵上 (豆柄山)、比高90m、古代の宮道に近接し、白河関と白河郡衙 (関和久遺跡) の中間に位置する

2.2 天王山式土器の8つの特徴 (山内清男・中村五郎・馬目順一・佐藤徳行・石川日出志等)

- 交互の刺突 (文) →交互刺突文
- 口縁の突起の発達 →北方系
- 受口状口縁の多用 →東北南部系
- 頸部一部の横帯状の素文化 →東北南部系？
- 磨消縄文の発達 →東北南部系？
- 上部部の下向き頸線文 (しばしば連弧文となる) →北方系
- 条の横走る縄文 RL 北方系
- 条の横走る縄文 LR



スライド16

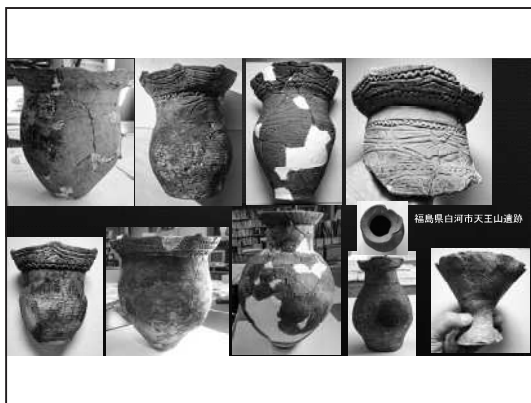


- 交互の刺突 (文) →交互刺突文
- 口縁の突起の発達
- 受口状口縁の多用
- 頸部一部の横帯状の素文化
- 磨消縄文の発達
- 上部部の下向き頸線文 (しばしば連弧文となる)
- 条の横走る縄文 RL
- 条の横走る縄文 LR

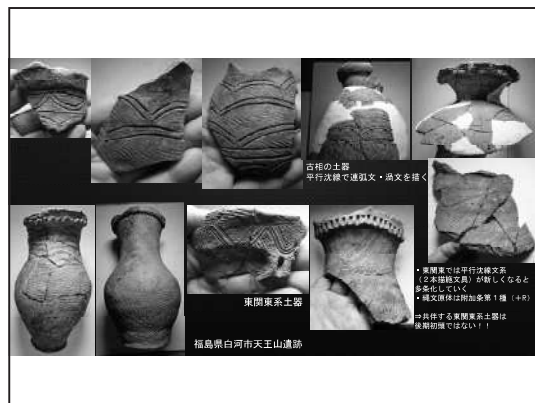
環状石器

アメリカ式石器

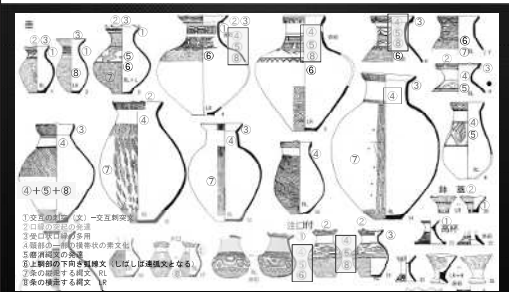
スライド20



スライド22




スライド23



- 交互の刺突 (文) →交互刺突文
- 口縁の突起の発達
- 受口状口縁の多用
- 頸部一部の横帯状の素文化
- 磨消縄文の発達
- 上部部の下向き頸線文 (しばしば連弧文となる)
- 条の横走る縄文 RL
- 条の横走る縄文 LR

スライド24



④+⑤+⑧

明確に文様帯が区分されている
連弧文に由来する文様が多い
一つの文様帯に、出自系統が異なる文様を入れることはない

④+⑤+⑧

①交互の刺突 (文) →交互刺突文

②口縁の突起の発達

③受口状口縁の多用

④頸部一部の横帯状の素文化

⑤磨消縄文の発達

⑥上部部の下向き頸線文 (しばしば連弧文となる)

⑦条の横走る縄文 RL

⑧条の横走る縄文 LR

東関東系 (1種) 中条件

東中群式 (環状山式) が伴う

白河市定家 東中群式編
白河一考 (2001) 116

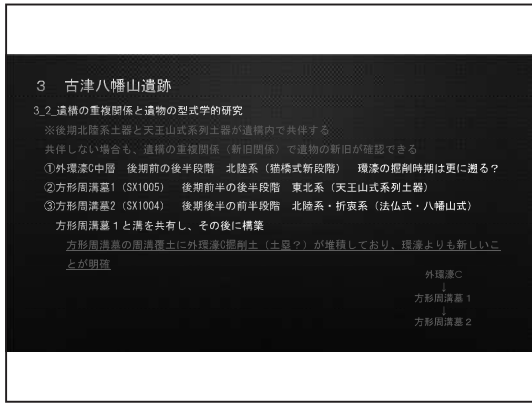
スライド25



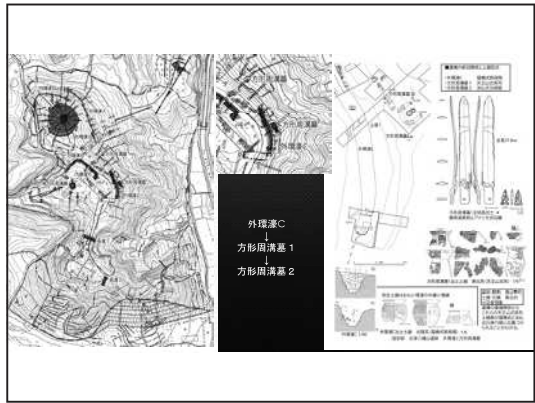
スライド26



スライド27



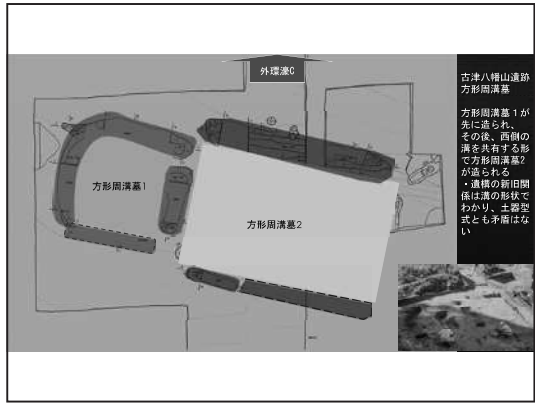
スライド31



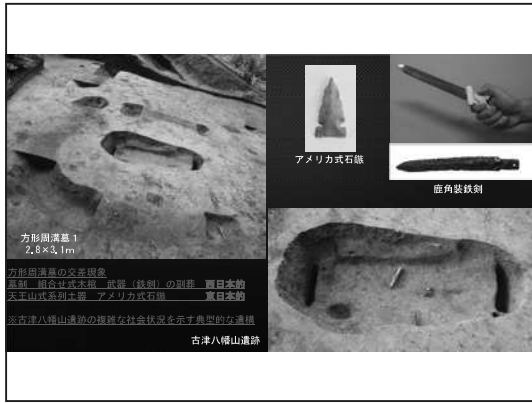
スライド32



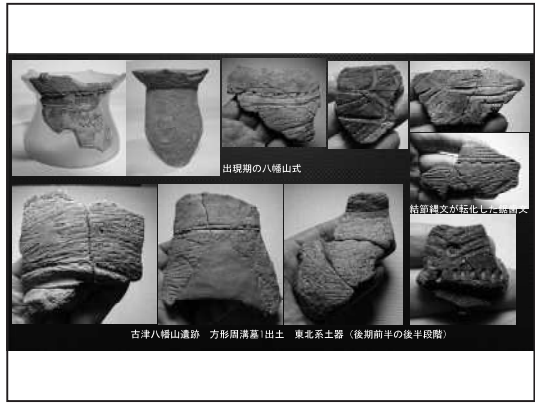
スライド33



スライド36



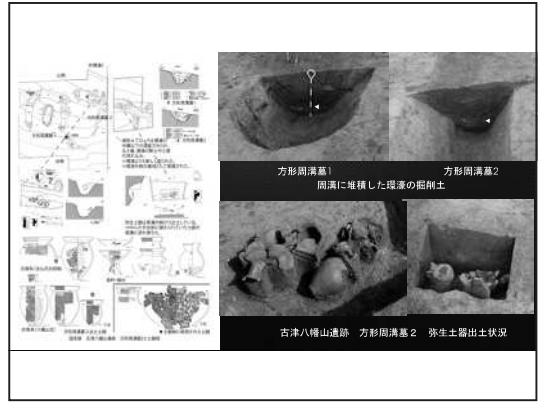
スライド38



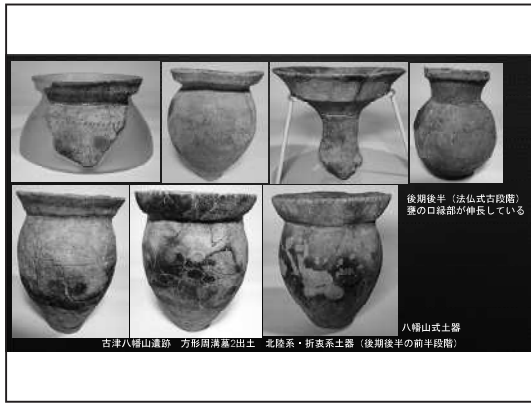
スライド40



スライド41



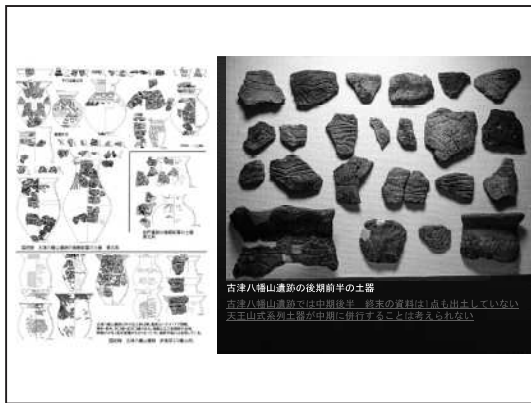
スライド42



スライド43



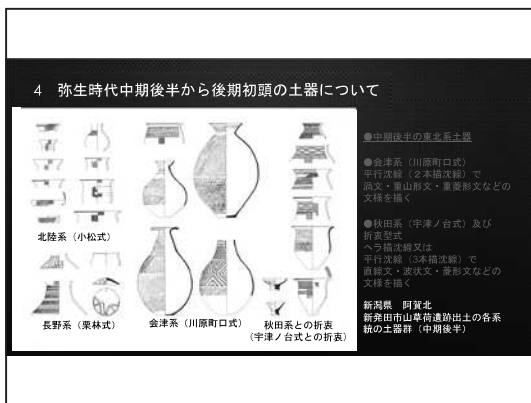
スライド44



スライド45



スライド46



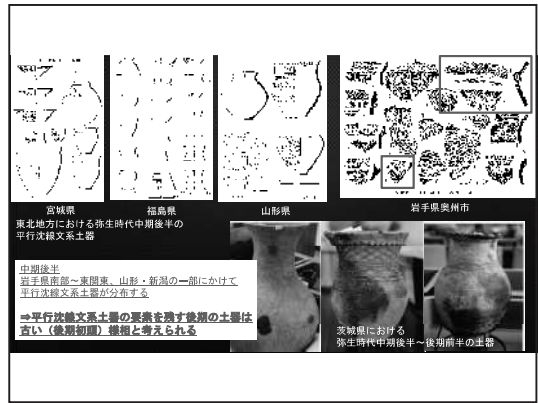
スライド47



スライド48



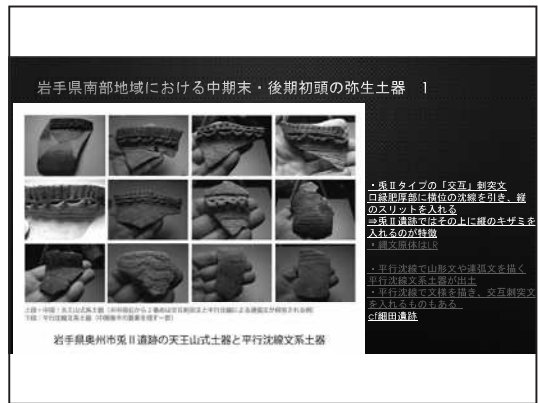
スライド49



スライド50



スライド51



スライド52



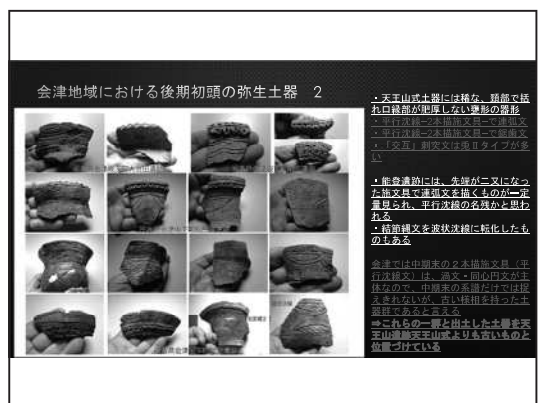
スライド53



スライド54



スライド55



スライド56

5 弥生土器からみた北陸と北海道南部・東北部との交流

5_1 北陸-石川・石川県における天王山式土器系列土器群

- 出土遺跡数 富山県36、石川県40遺跡
- 主要部文系列 富山県16、石川県19遺跡

5_2 北陸における天王山式土器系列土器群の特徴と系譜

- 主要部文系列が中心
- 口頸部間小連弧文・・・・・・
- 縦位置縞文・・・・・・東北部

原部に主要部文を入れる土器の上腹部に様々な模様が入れられる

- S字状連弧文・・・・・・三陸・上北三八～各地
- 上腹部 山形文土器群文(波状文)・・・・北海道南部～
- 円台形連弧文・・・・東北部～

⇒主要部文とのキメラ土器としてあらゆる範囲が北陸で見られる

⇒東北部・北海道南部にも見られる特徴が多い

⇒下子母川遺跡・多海川遺跡(縁部式土器・天王山式)の模倣品

⇒天王山遺跡天王山式土器にはみられない特徴

⇒各遺跡で明確な平行関係と系譜の系譜は確認することはできない(多数の中からは黒い土器の文が)

スライド57

Toyama Prefecture (富山県)

Ishikawa Prefecture (石川県)

Toyama Prefecture, Ishikawa Prefecture天王山式系列土器群 (富山県・石川県の天王山式系列土器群)

スライド58

色知用地帯

新近畿内の日本海沿岸地域では、
根柢農村・**奥谷川以南の**
石段・**上野**・**高島川流域**ではほぼ出土例はない

富山県36・石川県の遺跡の出土例は、上記地域を越えて
 広がったことと相俟に物語っている
陸路ではなく、海路であろう

富山県・石川県 天王山式土器系列土器群出土遺跡
 番号 主要部文系列

スライド59

5_3 口頸部間(口縁部頸部間)小連弧文の系譜

江上遺跡
 二ツ子遺跡
 戸原在道遺跡
 上野人遺跡
 下子母川遺跡
 富山県の天王山式系列土器
 石川県の天王山式系列土器
 大船崎遺跡
 石川モリ山遺跡
 石川県の天王山式系列土器

スライド60

青森市弥沢遺跡
 秋田県三穂町館の上遺跡
 青森県穴所村家ノ前遺跡
 長岡市松ノ内遺跡

北陸における口頸部間小連弧文の系譜

スライド61

5_4 上腹部山形文の系譜

石動遺跡(新潟県)

石動遺跡出土のキメラ土器(頸部縞文・上腹部山形文)

スライド62

太領3号墳
 兵衛遺跡
 王子山遺跡
 下子母川遺跡
 館ノ内遺跡

会津坂下町館ノ内遺跡以外には、日本海沿岸を中心に分布しており
 日本海側特有の文様と言える

斜線に沿って入れられた
 斑状や縞状文

後期後半
 根柢遺跡

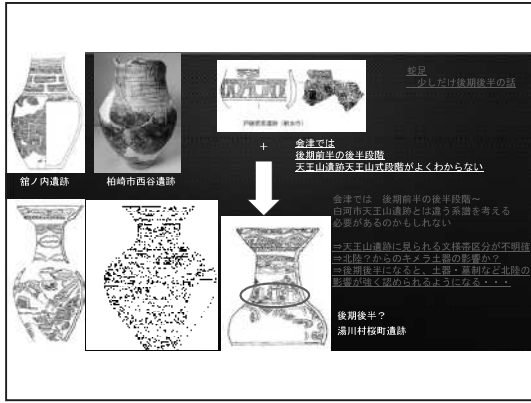
スライド63

大槻3号墳(石川県)

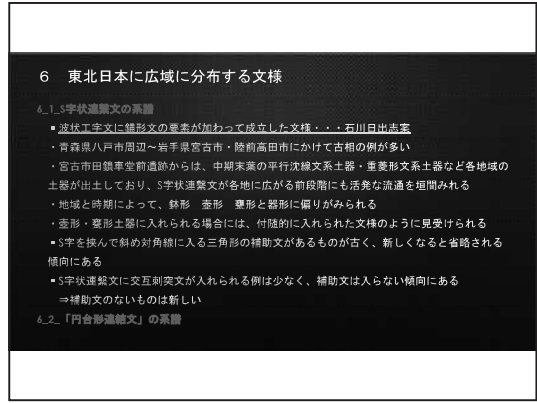
石動遺跡(新潟県)

館ノ内遺跡(福島県)

スライド64



スライド65



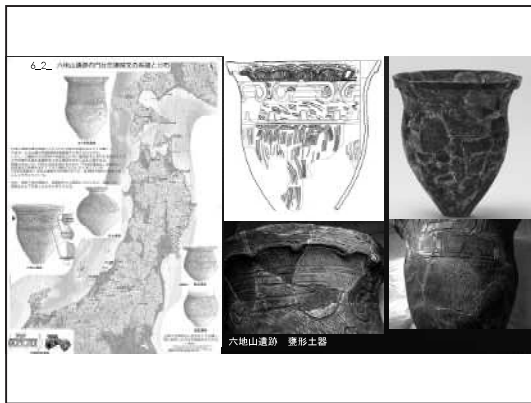
スライド66



スライド67



スライド68



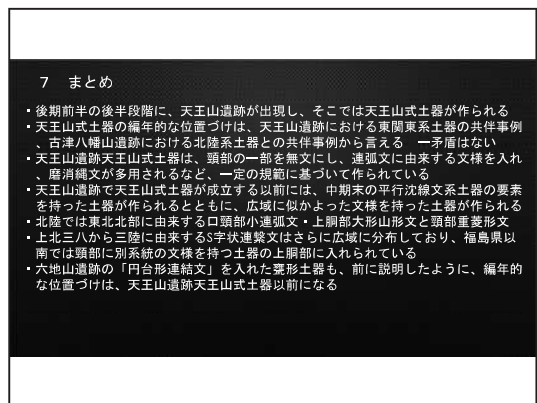
スライド69



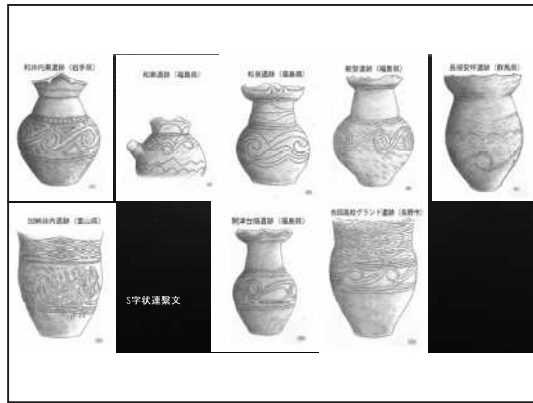
スライド70



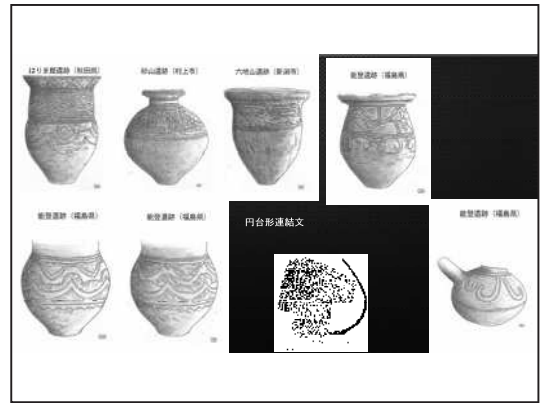
スライド71



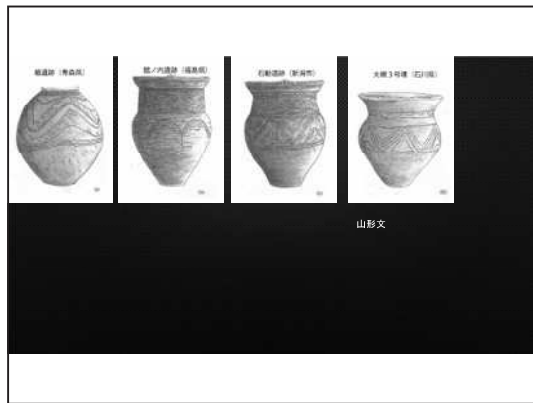
スライド72



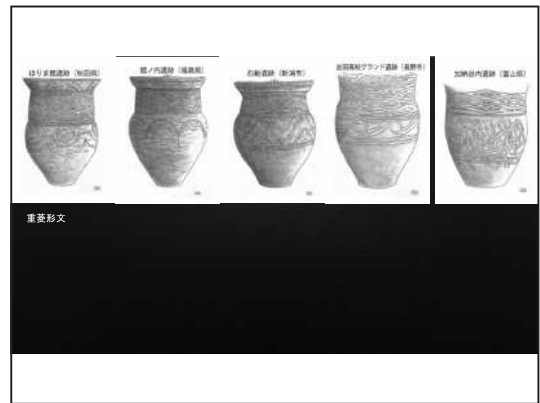
スライド73



スライド74



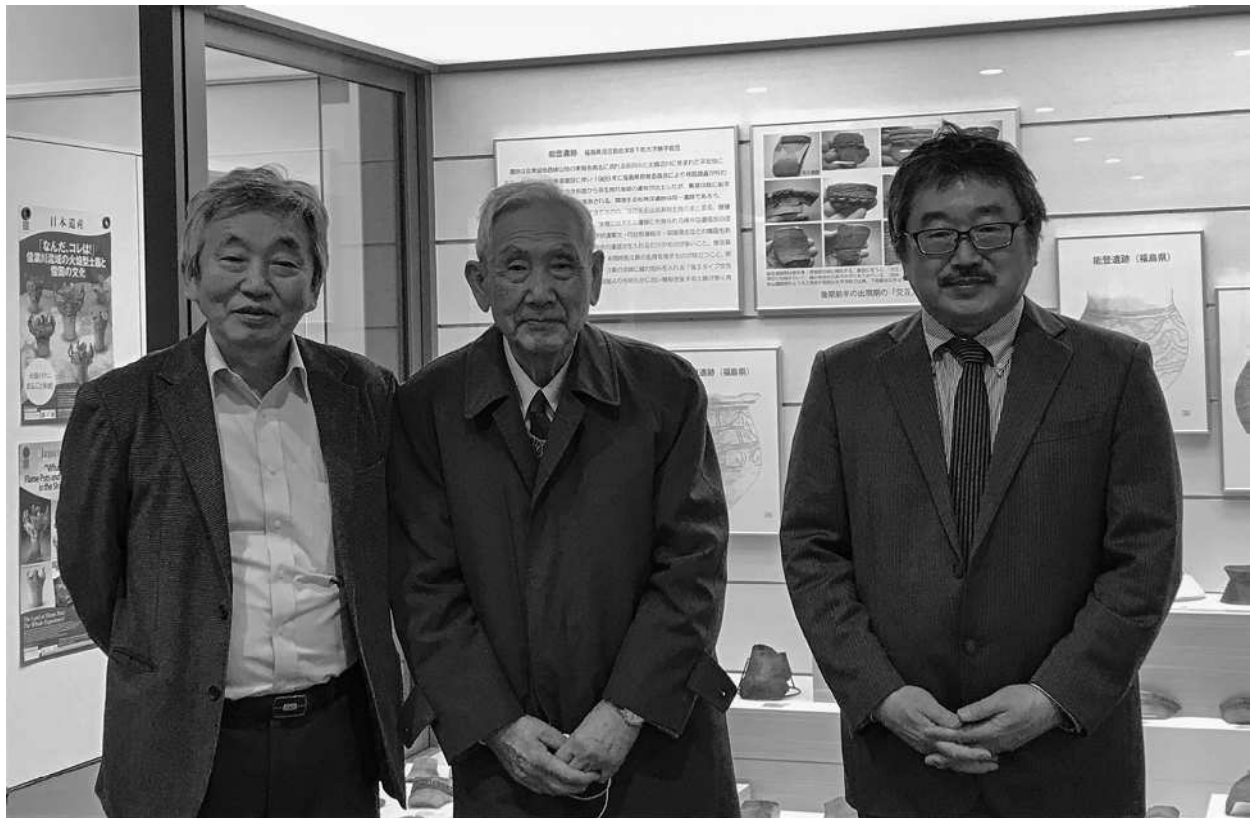
スライド75



スライド76

写真・図出展一覧

- スライド4：新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2000『裏山遺跡』、新潟県教育委員会2010『立野大谷製鉄遺跡 姥ヶ入製鉄遺跡 姥ヶ入南遺跡』、三条市教育委員会1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』、木高平村教育委員会2002『根塚遺跡』、東義大学校博物館2000『金海良洞里古墳文化』
- スライド6・スライド7：大阪府弥生文化博物館2013『弥生人の船ーモンゴロイドの海洋世界ー』
- スライド16：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会
- スライド20：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会、(公財)福島県文化振興財団福島県文化財センター白河館2018『白河市天王山遺跡の時代』
- スライド24：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会
- スライド25：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会、福島県白河市2001『白河市史第4巻(資料編1)』
- スライド26・27：新潟市文化財センター2013『国指定史跡古津八幡山遺跡歴史の広場 弥生の丘展示館ガイドブックNo.2(弥生時代編)』、新潟市文化財センター2013『国指定史跡古津八幡山遺跡歴史の広場 弥生の丘展示館ガイドブックNo.3(古墳・奈良・平安時代編)』
- スライド32・36・42・44・45：新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』、新津市教育委員会2004『八幡山遺跡発掘調査報告書ー第11・12・13・第14次調査ー』
- スライド47：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会
- スライド50：宮城県1981『宮城県史34資料篇11考古資料』宮城県史刊行会、福島県1964『福島県史第6巻資料編1考古資料』、山形県1969『山形県史資料篇11考古資料』、伊東信雄1954「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」『古代学』第3巻2号古代学協会
- スライド57：青森県埋蔵文化財調査センター1985『大石平遺跡発掘調査報告書』、(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』
- スライド59：地図・Google Earth
- スライド62・67：集成図の出典は省略
- ※スライドに使用した土器の写真は全て渡邊が撮影した。



当日会場にて撮影
(石川日出志・中村五郎・渡邊朋和)